



『逃げなさい！』

(旧題)

『その話の、続きを。』

(講談社に投稿済み
→児童文学新人賞)
(2019年)

↓
だったけど【V i V i】った！の
で、
たとえ入賞してたとしても、

【辞退な事態！】

霧樹 里守
(きりぎ・りす)

目次

【 移転 の お知らせ 】	1
(感想はこちらのコメントへ)	2
(第2稿) 『 逃げなさい！』	
(第2稿)	5
『 逃げなさい！ 』	6
『 逃げなさい！ 』 (梗概) (2019年3月24日)	7
一. 0日目。(バスターミナル。深夜発)	9
二. 1日目。(公園。夕刻発)	13
三. 1日目。(夕方)	20
四. 1日目。(深夜)	25
五. 2日目。(午前)	32
六. 2日目。(午後)	37
七. 2日目。(深夜)	41
八. 何日目?	45
九. 海辺の街。(一日目)	49
十. 海辺の街。(二日目)	56
十一. 海辺の街。(ずっと)	63
十二. そして。.	67
(第1稿) 『 その話の、続きを。』	
(第1稿)	73
『 その話の、続きを。 』	74
(梗概) (第1稿) (2019年3月1日)	75
1. 1日目。(バスターミナル。深夜発)	76
2. 2日目。(公園。夕刻発)	80
3. 3日目。(よそハマ。海浜公園)	85
4. 4日目。(海岸。砂浜)	92
5. 何日目?	98
6. 海辺の街 (一日目)	103
7. 海辺の街。(二日目) ...焼きそばと図書館...	108
8. 続・海辺の街。(夏休み! そして...)	114

(草稿&没原稿)	
(草稿&没原稿)	121
(設定資料)	
(設定資料)	125
(背景)	126
(プロット)	127
(キャラ設定)	
(キャラ設定)	131
(キャラ設定)	132
(執筆中日誌)	
(執筆中日誌)	135
(2018年8月12日) 惧いものを見てみる。 (- - ;) 	136
(2018年8月14日) 次回の講談社児童文学新人賞への投稿作のタイトル決 まった。	139
(2019年3月1日) 3月は、コレを先にやっつけまーす... !	141
(2019年3月1日) ...作戦たーいむ！...w (^ ^ ;) w...★	143
(2019年3月8日) つるつるっと調子よく、.	145
(2019年3月22日) メ切まで、あと一週間になりました！	147
(2019年3月24日) 最終章、「書かない。」まま提出しちゃえ！	150
(借景資料集)	
(借景資料集)	155
奥付	
奥付	159

【 移転 の お知らせ 】

☆

☆ 投稿版（第2稿）は、こちらに移転済みです。

☆

☆ 『逃げなさい！』

☆

<https://novel.daysneo.com/works/afcdb35e56631a8ac0da4b4fcf30a2cc.html>

☆

☆ （が、近日中に？ ノベルピアに再移転の予定です。）

☆

=====

(旧題) :『その話の、続きを。』

講談社「児童文学新人賞」投稿用。

(締切2019年2月28日)

=====

(感想はこちらのコメントへ)

感想はこちらのコメントへ

↓

<https://puboo.jp/book/126062>

(第2稿) 『 逃げなさい！』

(第2稿)

(第2稿)

(2019年3月24日～)

『 逃げなさい！ 』

『 逃げなさい！ 』

『 逃げなさい ! 』 (梗概) (2019年3月24日)

『 逃げなさい ! 』 (梗概) (2019年3月24日)

霧樹里守 (きりぎ・りす)

首藤章子 (すどう・あきこ)、14歳。

学校での綽名は、「穴あきアキコ」。

居場所が、どこにもない。

ある日、「もう、どうしても、絶対に !

...家には戻りたくない！」と。

深夜のバスターミナルから歩き出す。

死んでも戻らない。

死ぬなら、海にしよう。

海へ。海へ。

(...だって、海なし県の生まれだし... !)

痛むお腹と痛む脚。痛む魂をひきずって...

歩いて、歩いて。

海へ。

綺麗すぎて、死ねない。

歩いて。

歩いて。

生きて。

生きのびて....。

捕まった。

そんな、物語。

=====

(キャラ設定) (2019年3月24日)

・首藤章子（すどう・あきこ）

14歳。中学生。家出。

・首藤暉彦（すどう・てるひこ）

章子の父。国家公務員。DV夫。

・首藤昭美（すどう・あきみ）

章子の母。夫とは婚活で知り合う。押しかけデキ婚。

夫の親族からは「身分違い」と反対を受け立場が弱く、いつもびくびくしている。

=====

場所：地球、日本、関東～東海地方。

時代：20世紀終盤～21世紀前半のとか。

季節：6月末（梅雨前？）～夏休み。

一. 0日目。(バスターミナル。深夜発)

『逃げなさい！』

霧樹里守（きりぎ・りす）

一. 0日目。(バスターミナル。深夜発)

もう。絶対に。

どうしても、家には二度と、帰りたくない。

…と、章子（あきこ）はおもった。

場所はバスターミナルで。

いつもいつも、ここを通るたびに、それは考えてきたことではあった。

でも今日は、

今日こそは…

本当に、二度と、戻りたいとは、思えなかった。

死んでも。

章子はぼんやりと、まとまらない考えと、しつこくて鈍い頭痛と下腹部痛をもてあましながら、いつもの塾帰りのはずの夜更けの。

この地方の中核都市のひとつ、一番大きな駅ビルの地下から、覚えきれないほど多方面へと続く近距離と遠距離のバスが常時頻繁に出入りする、巨大な地下迷路のようなバスターミナルの…

一番かたすみの、デパ地下の食品売り場からの重たい荷物を大量に提げた兼業主婦層の人たちだけが知っているような、狭い抜け道の通路脇の、寒い、いつものベンチで。

いかにも、次のバスまでの長い待ち時間を、持て余しているような風を裝って…

壁によりかかって、うつらうつらと寝ていた。

本当はもう何本も、家へと向かう直通路線の本数の多いバスを見送っている。

脚のあいだからはまだだらだらと、たくさんの血と体液が流れている感触があつて。

とてもとても、気色が悪かった。
なまあたたかいのに、冷たくて、ぬるくて、…痛い。
一番ぶつとい注射針で何回も突つかれるような…
激しい、鈍痛。
悔しい。
つらい…

いっそのこと、このまま出血多量で、死んじゃえれば、
…一番いいのに。
なかば本気でそう思って、ずっと座っていたのだったが…
あいにくと、ただひたすらに気分が悪いだけで、貧血で気絶することすらなかった。

「…あなた、大丈夫？」
時折り、通りすがりの、自分自身も色々と大変そうな、とても疲れた顔色だったり、大荷物を抱えていたりする、それでも。
困っている他人をみかけたら、ついつい「助けたい」と思ってしまわざにはいられない。
そんな風な、見知らぬ小母さんたちが、声をかけてくれた…。

「あ、大丈夫です。…バスまで、まだ30分くらい、あるんで…」
章子は礼儀正しく答えた。
鬼母の声が、いつも脳内に聴こえる。
『きちんとしなさい！ きちんと！ きちんと！ きちんと！
なんでアナタは出来ないの！ きちんと！ 普通に！ よその子たち、みたいに…！』

あの鬼母なんかじゃなくて、このまともで親切そうな小母さんたちの誰かが、あたしの
「本当のお母さん」だったらしいのになあ…。
もっと小さい頃に、本気で考えていた空想を、ふいに思い出す。
親切そうな小母さんやお姉さんたちは心配そうに、何度も何度も、章子のほうを振り返
りながら…
自分たちが乗るバスが来ると、仕方なさそうに乗りこんで、去って行く。

(…いいなあ。帰る家があって…)

章子はぼんやりと考えた。

そして同時に、

(もう、帰りたくない…！)

絶対に。と、思った。

そう思いながらも体も心も重すぎて、麻痺してしまって、身動きすらもできぬままに、う

つらうつら…

していた章子の眼に、赤い色が映った。

その方面へ行く今日の「最終バス」を意味する…

通称「赤バス」の時間帯に入った。

あたりの雰囲気が、あまり馴染みのない「深夜」という雰囲気に…

なっている。

ぞくりと。寒さを感じた。

制服が、じっとり湿っている。

章子の、不快な感じの冷や汗と…

それだけじゃなく、梅雨のあいまの、霧雨のような…

湿気が、じとりと、肌に冷たく感じた。

重たく汚れた分厚いぶたカバンから、ぐしゃぐしゃにされた汚いジャージをひっぱり出して眺めて溜息をつき。

仕方なく、上着だけは着た。

霞む白銀の天井灯が照らす地下バスターミナルなダンジョン構内に、人の姿はもうずいぶん少なくなっている。

さっきから何度も、章子のまわりを行ったり来たりしている…のは、掃除しがてら監視してまわっている…

警備員の、制服だ。

(…厄介ごとを起こすなよ…?)

その眼が冷たく睨みつけていた。

章子を。

(さっさと帰れ。不良娘が…!)

その、陰惨な…疑い深そうな…

顔つきが。

鬼父の暴力を、思い出させた…。

ぞくりとした。

思わず、立った。

ちょうど、すぐ前を、ちょっと迂回しながら章子の家に向かう方面の、完全に、今日の最終バスが、赤い紅い色の行先表示を、魅せびらかしながら…

走って行って、停まった。

停車時間は数分間ある。

のろのろと、歩いていけば…

まだ、乗れる。

章子は考えた。

…いつものように。

あれに乗って…

降りて。

歩いて…

ドアを開ければ。

とりあえず。

食べるものはあって、

眠る場所もある。

着替えるものもあるし、

明日の…

学校の…

教師の嗜虐と、女子の暴力。

そして、…男子の乱暴。

嫌なことも…

ぜんぶ、有る。

*

章子は通り過ぎた。

バスの前を。

だらだらと人の群れが乗りこんでいって、

バスは定刻に発車した。

ぐるりと回って、章子の家の方面へと向かう。

その、反対側へ。

章子は、歩きはじめた…。

二. 1日目。(公園。夕刻発)

二. 1日目。(公園。夕刻発)

目が覚めたら。

空の下だった。

一瞬、自分が誰で、どこで、

何をしているのか…?

分からなかった。

もうすでに傾き始めている時刻らしいオレンジ色の太陽が正面からぽかぽかしていて、濡れた服がすっかり乾いていて。

からだじゅうの、特に体の奥の芯の芯から麻痺してくるようだった、ずっと続いていた冷えや痛みや、吐きけや気持ちの悪さも、ずいぶん軽くなっていて。

よく本の中とかで「生まれ変わったような気持ち」と表現しているのは、こういうことだったか…と、ちょっとだけ、驚いた。

見晴らしのいい場所だった。

関東平野が一望できる感じの、どこかの小高い丘の上の、公園の、

…振り向いて見回してみたら一番隅っこ、崖がわの外れにあるベンチだった。

(ああ…)

と、昨夜のことをぼんやりと思い出した。

*

のまま、歩き始めて…

歩いて、

歩いて…

おなかがすいて寒くて。

途中のコンビニで、ちょっとだけ、歩きながらでも食べられるものと、ビニールの安いレインコートを買った。

それからまた、ほんやりと、
歩いて、歩いて…

どこへ向かっている道なのはさっぱり分からなかったが、とにかく。
あの嫌な嫌な厭な厭な、地獄の家へと続く道とは、
正反対の方向だ。
ということだけは、
確かだった。

いつも、背中から責めるように追いかけてきていた月が、
今は、歓迎して、励ましてくれているかのように、
真正面に、ある…。

ほんやりと、霞む月を眺めて歩いていたのはほんのちょっとの間で。
時刻が深夜をまわる頃になると、じっとりと冷たい、霧雨が降ってきた。
買ったレインコートを羽織ってはいたけど、裾が短かった。失敗だった。
スカートから下が、かなりじっとりと濡れた。
靴と靴下がびちゃびちゃってきて気持ちが悪かった。
でも、ずっと歩いた。

何も考えられなかった。からだは辛かった。
でも、歩いた…。
そして。

住宅街は途絶えて、街路灯も途絶えて。
ただずっと、何も考えずに道なりにまっすぐ歩いてきた小路は、曲がりくねりながら、小
高い丘を…くねくねと、登っていった。
あたりは真っ暗で何も見えない雑木林と、何かの工場か倉庫のような無人らしい建物が、
まばらに点在するばかりになっていた。

夏至の前の梅雨の晴れ間の、東の空が、白みはじめて。
その時。
小高い丘の頂上が、かなり広いめの公園になっていた。
…夜明け前で、人影はない。

ほんやりと大きな駐車場のなかへ歩いて入ると、水飲み場があった。
口をつけて、ごくごくと、喉を鳴らした。
ちょっとだけ、生き返ったゾンビに、なったような気がした。

(...ああそうか。コンビニで、何か、飲むものも買えばよかった...)
そんなことを考えていたら、きらきらと明るく光り輝く、自販機が目に入った。
ちょっと、おかしくなった。
そういえば、道沿いにも、いくらでも、自販機も、他のコンビニもあったのに...
...自分は。
喉が渇いている。ということにすら、気がつけないような。
そういう、状態だったのだ...。

(ほんとに... ゾンビみたい?)
一番大きなスプドリのペットボトルを選んで、小銭を入れて、ゴトンと音を鳴らして買って、ごくごくと...
一気に、半分くらい飲んで...
目の前の、ちょっと離れた場所にあったベンチにまわりこんで、ストンと、座った。

東の空から。

...朝日が... !

...きらきらと、金色の、陽射しが... !
...自分の、汚れきったからだを...、
照らした！

(...すごい... ! 綺麗... ? に、なった... ? ?)

(ゲームみたい！...『浄化』？ ...って言うの、これ... ? ?)

...と、思ったことまでは...
覚えている。

そのまま、意識が途切れた...。

*

(で、...寝てたのか。今まで...)

時計を見ると、午後の三時を過ぎてる。
昨日のあれから、あの、午後の遅くの、最低な人生の中でも一番に、最低最悪だった、ドン底の、ドン引きの一瞬から。

…二十四時間…
くらい、経ってる…。

…ずいぶん。
世界が、変わったなど。

丘の上から、一望できる関東平野の…
はるかかなた…

あれは、富士山?
あっちは、つくば山…?

…を、眺めました。

(…もしかして、あたし実は、もう死んでて。ここは… 天国…?)
そんなはずはない。と思いながら。
章子は、そんな感じがしていた。

とにかく。
もう、帰らない。
のだ…。

それだけで。
もう、あの地獄の日々では、
なかった。

*

(どんなになってるのかな…?)

ちょっとだけ、後にしてきた地獄の、「いつもの日常」のあの日々が。
ちょっとだけ、壊れた? あの世界のありようを…
想像した。

大騒ぎになって、徹夜で探されてるだろうか?
まったく無関心で、冷淡に。
いてもいなくてもどうでもいいやと。
見捨てられてる。だろうか…?

…どっちもあるような気もしたし、どっちでもないような、気もした。
とにかく、
どうでもよかった。

もう、帰らないのだ。
二度と…！

*

それでも。
(たぶん、警察とかに見つかるのは… まずいよね？)
中二ともなれば、そのぐらいの知恵はつく。

陽射しを浴びて、暑くなっていたので。
湿気がこもって水滴にすらなっているコンビニのレインコートは、ぱりぱりと脱ぎ捨てた。
服…
かなり目立つ、県下ではそこそこ有名な、私立中学校の…
制服。
どろどろの、砂だらけの、汚い足型のついた、汚れた白い体液の滲みまで着いた…
制服。

あたりを見回した。
トイレがあった。

今日はまだ平日なせいか、さいわい人影はない。
わりと綺麗に清掃されていることがとてもありがたかった公園の水洗トイレの個室に籠って、着ていたものはぜんぶ脱いだ。

昨日の夕方からずっと、バスターミナルで座ったままで一度もトイレにも行かず、そのまま歩き始めてしまって、ただひたすら歩き続けたままで…
やっぱり一度もトイレに行かず、ナプキンを取り換えるもせず。
そしてさらに昼間じゅう、ずっとこんこんと爆睡していた間に、股間とスカートのお尻の部分が、大悲惨！ な事態になっていたけど…
ありがたいことに出血そのものは、もう停まってくれていたようだった。

脱ぎ捨てた汚れた下着の代わりに、
体操着のブルマでいいやと、直接履いた。
上下も、とりあえず制服よりはマシな状態の、
ジャージに着替えた。

トイレも大小を済ませて、個室から出て。
手を洗って顔も洗って、髪をとかして…

歯ブラシも持っていたんだったと、思い出してポーチを探って。
歯も磨いたら。
本当に、生まれ変わって別人になったような、気がした…。

ベンチに戻って、しばらく考えた。
今日はとにかく、こんなところで一日眠り込んでいたのに、一度も大人に見つからなかつた？ のは。
たぶん、ものすごく、運が良かった…。
でも。

もしウルサイのに見つかって、学校に通報とか、警察に補導とか、されたら…
連れ戻され、る。

それは、絶対に、ダメだ。
嫌だ…！

重たい通学カバンをひっくり返して、一番必要なものだけ取り出した。
ジャージを入れていた学校指定の袋は、それでも校名は入っていないし、
ヒモを引っ張ればナップザックにもなるやつだ。
要るものだけを、詰め替える。

ぶたカバンと汚れた制服は…「ごめんなさい。」と係の人？ にこっそり謝りながら。
公園の隅にあった小型の焼却炉の口の中に、ぎゅうぎゅうと詰め込んで隠した。

もう一度、きちんと顔を洗って、髪も丁寧に梳かしながらして、
きちんと後ろで一本縛りにして。

体育ジャージにナップザックに、ちょうどよく？ 歩きこんで、けっこう汚れたスニーカー。
これでさくさくと元気そうに歩いていけば、普通に、部活の帰り。
にしか見えない？

…たぶん…。

家出だと、ばれないように…。

章子は、新しい人生の、一步を…

踏み出した。

三. 1日目。(夕方)

三. 1日目。(夕方)

一番濃くて甘くてカロリーが高そうなドリンクを幾つかの自販機の中から一本選んで、ごくごく飲みほして朝ご飯？の代わりにして。

とりあえず、とにかく南に向かった。

辿ってきた公道の行く先が、ぐねぐねと下りながらそちらへ続いていたし、絶対に戻りたくない地獄の家と学校からは、正反対の方向だ。

目の前に開けているのは関東平野で、広くて広くて、建物がいっぱい。

中学生が一人くらいこっそり紛れ込んでも、どこかで生き延びられるような気がした。

(でも、もし。)

と、章子は考えた。

警察に捕まって。

連れ戻されるくらいなら…

死のう。

そのほうが、絶対にマシだ。と…

(どうせ死ぬなら、海が見たいな。)

ふいと思った。

(もうずっと長いこと、連れてってもらえなかっただし。

子どもの頃に見たきりだし…

海なし県の、生まれだし！)

…海を観てからなら、死ぬのも悪くなさそうだ…

そう考えたら、気分が明るくなった。

海を観て、どこかで死ぬまで。

生き延びよう。

…なんとか…。

そんなことをつらつらと考えながら、どんどん歩いた。

いかにも、地元の中学生の、部活の帰りのような顔をして。

まるで見知らぬ、初めての、住宅地や、商店街を…

いくつも、通り過ぎた。

*

どこかの、駅に出た。

知らない、私鉄の駅だ。

かろうじて地名と線名だけは、社会の教科書で知ってる。

そんな町…。

にも、見慣れたチェーン店のバーガー屋はあった。

座って、夕飯？ を食べた。

おなかが、ぐうと鳴って。

野菜たっぷりの、赤い色の酸っぱいスープが。

もじどおり、胃壁に染み渡るように。

美味しく、思えた…。

(…ご飯が、美味しいなんて…！)

…思えたのは、いったい、何年ぶりだろう…？？

それからそーっと、まわりの席の人たちからは看られていないことを確認しながら。

財布の中身を、数えた。

よりによって、昨日。

あの、たぶん、人生最悪の、あるいは、一番目か、二番目の…？

その日に。

財布の中に、塾の夏期講習の申し込みをするはずだった、一万円札が、何枚も…

束で。

入っていたのは、きっと。

…神様とか、何か。

そういう見えない力。からの…

『逃げなさい！』

という、応援メッセージのように…

思えた。

『逃げなさい！

逃げて、いいのよ！』

アニメの科白を思い出す。

それ、ずっと、わたし、言って欲しかった…。

涙が落ちた。

哭くことすら、久しぶりだった…と。

気がついて、声を殺して…

泣いた。

*

とりあえず、うんと節約して使えば。

しばらくは、生き延びられそう？ だった…。

…死ぬまで、は…。

(たとえば、一日千円ずつ使うとしたら…

秋くらいまでは、生きられる…？)

でも、ちょっと。と、自分の姿を見下ろした。

今日は金曜の夕方で、幸いなことに校名は入っていない汚れた体育ジャージで、夕方遅くに一人でバーガー屋にいても、そんなには、目立たないけど…

明日からは土日で、昼間に、この恰好で町中をふらふらしてたら…

かなり、目だってしまうのではないかと思う。

それにそもそも汗臭い。昨日は体育館で、散々な目に遭わされて…

ちょっと吐いた、その臭いすら、

…するような…？？

章子は急に不安になった。

髪だって、水浴びしただけで、ちゃんとは洗っていない…！

とりあえず、バーガーのトレーを「きちんと」片づけると…

眼についた、駅前の、一番安そうな量販店に、向かった。

一番安い服と一番安いリュック。

でも、自分で選んだ。

初めての、買い物だった…

嬉しかった。

駅のトイレで、いそいそと着替えた。

そのまま、電車に乗った。

だって、いくらなんでも。

ここまで歩く途中に見た、広い広い関東平野を。

海まで、歩くなんて…

無謀に過ぎる遠さだと、思えたからだった。

*

（あたし一人で、都心に来るなんて…！）

と、思いながら、幾つかの大きな駅で、苦労して路線を調べながら…

乗り換えた。

（でも、）

と、ちょっと思った。

家出した、あたしからの女のコが、ひとりで生き抜くためなら…

このへんに潜んだほうが、いいのかも？

テレビの話や雑誌の片隅には、よくある。

『からだを売って』家出して、生き延びる…方法だ。

（でも、）

それでは、今までの地獄と、あんまり、変わらない…

と、思った。

章子は、覚悟を決めた。

地獄の家には、戻らない。

からだも、売らない。

それで生き延びられないかったら、

お金がなくなつて、

おなかが空いたら…

死のう。

海で…

海へと向かう、一番まっすぐな、電車に飛び乗った。

四、 1日目。（深夜）

四、三日目。（午前様）

慣れない…というか。

人生初の…！

『都心の帰宅ラッシュ』の…

満員電車に、押しつぶされた。

（…働く。って…！ こんなに、大変なのか…！）

潰されたり、踏まれたり。

怒鳴られたり、嫌味を言われたり。

知らない汚い親父に通りすがりにいきなり胸を掴まれて、痛くて悲鳴を上げたり。

ぎゅうぎゅう詰めの電車の中で、後ろから誰かに勝手にお尻を揉まれて。

スカートをめくられて、下着のなかに指が這いこんで…

気持ちが悪くて、

涙が出てきたり…

（…これじゃ、あの地獄と変わらない…！）

気分が真っ暗になった章子は、途中駅でふらふらと下車した。

しばらくホームのベンチで、へたりこんでいた…。

（ここ、どこ…？？）

路線図を観ると、いくつか乗り換えれば、別のもうちょっと田舎寄り？ のルートからも、広い海へ、出られるようだった…

電車がすきはじめる時間帯まで、ホームのベンチでぐったりして待って…
ゆっくり座って移動できそうな、空いている各駅停車に、乗った。

*

乗り換えた西に向かう電車の中は、適度に空いていた。

三々五々と離れ離れ座っている女性客たちは、それぞれのグループごとに遠慮なく、大声でお喋りをしている。

座って、ただ聞いているだけで、色々と、いい情報源になった。

いくつか各駅停車の乗り換え駅を乗り継いで、

海に、着いた…！

ころには、深夜に近く、なっていた。

真っ暗かと思っていた、海辺は…

意外に明るい。

そして、カップルとか友達グループとか、家族連れとかのバーベキュー？ とかで、意外に、賑わっていた…。

(これは、死ぬ場所じゃ、ないなあ…)

章子はぼんやりと苦笑した。

しばらくの間、海岸の国道沿いのガードレールによりかかって。

黒い波のうねりと、白い波しぶきのぼしゃりぼしゃりとした音と動きを、観るともなしに、観ていた。

夜の海は、初めてだった…

なんだか、癒されたような、…暖かい、自由な気分に、なった。

(…死ぬのは、昼間の…、

青い海を観てからでも、いいよね…？)

回れ右をして、また、歩き始めた。

電車の中で小母さんたちが話しているのを聴いた…

二十四時間営業で、中でごろごろっと眠れるスペースのある、

スーパー銭湯とやらを、探して…。

*

二時間ほど歩くと、大きな道路沿いに、それはあった。

夜中に子どもが一人で入れる場所かどうかが心配だったが、明日は土曜日とあってか、駐車場には満杯の車が停まり、徒步や自転車で来る地元の人達も、ひっきりなしに出入りしていた。

中学生だけの、グループで来ているらしい女子たちも、結構、いる…！

いつも学校でやってきたように、ぼっちじゃなくて、そこのグループの一員なんです。
ちょっとポーチの中を診ていて、遅れているだけなんです…！
という風を装いながら、前を歩く女子たちの後ろに紛れてそっと同じ切符を買って、
こっそり、紛れ込んだ。

ちょうど、「こういうとこ、初めて来たんだけど…！」と、窓口の人たちに利用方法を質問している初老の夫婦がいたので、自販機のシャンプーを眺めるふりをしながら、係の人の説明を、しっかり聞いた。

…朝まで泊まるとすると、別料金が追加になるのかー！
…とは思ったが、財布の中身を考えれば、まだまだそのくらいは払える。

ロッカー室で服を脱いで、小さなりュックはしっかりしまって。
超！ ありがたいことに！
中にコインランドリーまであった…！ と、大喜びで。
汗臭いどろどろのジャージと体操着を、まとめて洗った。

ゆっくり～～～～り！
お風呂に、浸かった。

子どもの頃、どこかで銭湯に入れてもらった記憶はぼんやりあるけど。
こんなに大きなお風呂に入るのは、修学旅行の旅館くらいしか経験がなかった…。

すごく大勢の人がいた。
のどかで穏やかで、湯気と熱気とざわめきに満ちて…

本当に、知らない異世界。に、
来たような、気分になった…。

*

のぼせそうになったので、慌ててあがって、ささっとシャワーだけ浴びて。
館内着とかいう、ちょっとデザインはださい、婆ネグのようなものに着替えて。
ご飯を食べるところに行った。

食券を選んで買って、カウンターで渡して。
待つてると、番号で呼ばれる。

ぜいたく？ をして野菜がたくさん！ 乗っているラーメンを頼んだ。
死ぬほど！
美味しい～～～！！

…と、思った。

満腹して、ぼんやりしていた。
(…死ぬのは、当分先でも、いいかもしない…)

なんだか、「嬉しい」という、気持ちを、
初めて知った…。

*

まわりを観ると、ほんとに異世界だった。

仲のよさそうな友達グループ。
仲のよさそうな家族づれ。
仲のよさそうな恋人？ どうし…。

ほんとに、異世界だった…

(テレビとか漫画とかのアレは、現実にはナイ、アリエナイ、
「理想の」家族とか。だと、思ってたのに…)

今、目の前でくつろいで、テーブルの周りではしゃぎまわっている小汚くて行儀の悪い
子どもたちを、一応？ 叱ってはいるが殴ったり折檻したりはしない、呑気そうな親たち
とか。

いわゆる「友達親子」とかいうのだろうか。おばあちゃんらしい人と母親と孫娘？ が、
一緒に、だらしないパジャマ姿で、だらしな～く座って、だらしな～く食べ散らかしながら、
きゃあきゃあはしゃいで。

おしゃべりに興じている、テーブルとか…

章子には、異世界だ。
(…気持ちが悪い…！) と、思った。

こんなの、こんな明るくて、夢みたいな、
天国みたいな世界...
(現実じゃ、ない。)

...章子に、とっては....。

*

...と、思っていたら... !

「ねーちゃん、ねーちゃん、ひとりか？」
「こっち来て、一緒に騒ごうや！」

.....ぞーーーーーっとして、固まった。
...知らない、酔っ払いの...、
お風呂あがりなのに、それでもなんだか小汚い感じの、おっさん達に...
取り囲まれて、いた。

「ビール酌してくれよ～！」
「添い寝もしてくれてもいいぞ～！」

「...あ、あの...ッ！！！」
章子は、固まった。

こういう場合、言っても...いいはずだ...「嫌だ！」と...
でも。
今まで。
「嫌だ」とか言ったが最後...
もっともっと、酷い目に。
遭わされ続けて、来た...！！

もはや一気に、「元の地獄に」引き戻されてしまった。
...哀しくて...
悔しくて、動けなくて...
絶望して、
涙目に、なった。

「…おい、やめろやオッサン！」

さっき、章子が、（気持ちが悪いッ！）と思った「夢の中の」理想の…、

「普通の」世界の…

家族みんなが「本当に」仲が良さそうで、祖父母と夫婦と兄弟姉妹が数人で、大きな一つのテーブルをひしめくように囲んでいる、その中の。

高校生くらいの…男の子が。

章子を取り囲んでいる、酔っぱらった、おっさん達をめがけて…

荒々しい声で、怒鳴った。

「そのコ、嫌がってんだろーが！」

「…やだ、ちょっと、おじさん達～？」

男の子の母親らしい、ちょっと酔っぱらっている女の人が慌てて振り向いて、すくっと立ち上がると、章子たちのほうへと、すたすたと歩いてきた。

「…こういう所で子どもナンパしないの！ そういうことがしたかったら、そういう店に行きなさい！

…さっさとあっち行かないと、店員さんを呼ぶわよ！？」

見ず知らずの、女人が…

何の得にも、ならないのに…

自分が巻き添えの被害に遭うかも、しれないのに…

問答無用で何ひとつめらわずに、章子の前に、立ちふさがって…

(…守って、くれた…！)

章子は、びっくりしていた。

おっさんたちは、「…なんだよ～う！」とか言いながら。

飛んで来た係の人たちにも脅されて。

早々に、自分たちの席へと、おとなしく戻って行った。

「…あんた、大丈夫…？」

びっくりして、涙ぐんで、固まっている…

章子の表情を誤解して。

知らない高校生のお兄さんの、お母さん的小母さんは…

優しく、教えてくれた。

「ひとりで来てるの？ じゃ、ここじゃなくて、あっちの席に座るといいわよ。女性専用だから。変なのが入り込もうとしたら、お店の人が、停めてくれるから。」

「…………、あ、ありがとう、ございます…ッ！」

生まれて初めて、人から、かばってもらった…！

章子の涙声のお札は、なんだか場違いに、大きく響いたようだった…

*

「女性専用」と、たしかに札が出ていた。
子どもは？ 入っていいの…？
と心配しながら、おそるおそる、中をのぞくと…
一人で来ているらしい女の人が、あちこちで、ゆっくりごろごろしていた。

数人で来ている人たちも、小声で、きゃっきゃと嬉しそうに盛り上がって、平和に内緒話をしている…。
(…ここも…！ 知らない世界…！)
驚きながら、ふわふわと、背中からちからが抜けていくのがわかった…。

もう今日はこれで限界だった。
壁際に山のように積んである折り畳んだ毛布は、無料で勝手に借りられるらしかった。
かなり混みあっていたが、章子は、すみっこのすみっこの壁のほうに、ちょうどぴったりはまりこめる小さな隙間を見つけた。
テーブルの角に隠れて、そおっと、横になった瞬間…。
爆睡。していた…。

五. 2日目。(午前)

五. 2日目。

がつっ！…と、額を殴られた。

軽い衝撃だったけど。

…きっと、またすぐに、二発目が来る…！

章子は、もう慣れ過ぎてしまって逆らいようがない、
恐怖と絶望と、無力感の暗闇地獄に引き戻されて。

「ひッ！」

…と小さく叫んで、両腕で頭をかばいながら。

無意識のまま、エビのように小さく硬く、身を丸めた。

「…あらやだ！ お嬢ちゃん！」

降ってきたのは、鬼父の拳固やなにか鬼母がよく武器の代わりに使う麵棒や雨傘ではなくて。

知らない…、女のひとの、声だった。

「どしたの、佐藤さん？」

「…脚、ぶつけちゃった！」

「…あ～！…そこね。そこに寝てると、見えないのよねえ～！」

「お嬢ちゃんっ、だいじょうぶっ？」

「こらこら、お客様でしょ？」

「あっそうでした～。お客様！ お客様！ …起きて～！」

章子は、…はっとして、目を覚ました。

(…何？ どこ？

…何ッ？？)

がばっと起き上がる…

ついさっき、自分のひたいを「殴った」らしい、

…テーブルの脚の、底というか裏側が…見えた。

「…ごめんなさいお客様～！」

(…思い出した…。昨日、お風呂の、「女性専用」の…、
畳の部屋で、寝たんだ…？)

ぶつかったのはその時、楯のように身を隠してくれた、低くて大きい…

八人がけの座卓？ テーブルで…

それを横向きの片方に持ち上げて、立てかけて。

女のひとは掃除機を、かけようとしていた、らしかった…

「あ～本ッ当に、すいません！ おでこ、ちょっと血が出てるわ！」

「…えと… あ、だいじょうぶです…」

「こすっっちゃダメよ！ ほんと、ごめんなさいねえ～っ！」

女のひとは慌てながら、腰のポーチから可愛い猫もようの絆創膏を出して、おでこにぺたんと貼ってくれた。

「…え…」

たったこれくらいの、怪我の、…手当を。

人に、『してもらった』のなんて…

初めて？ だった…。

「あ、…ありがとうございます！」

真っ赤になって、お礼を言った。

女のひとは、困ったように、慌てて手を振った。

「いえいえ、ぶつけちゃったの、アタシだしつ！」

「このひとソコツなんですよ～、赦してやってくださいね～」

まだけっこう若そうな女のひとの後ろから、年嵩の、おばちゃんとおばあちゃんの中間くらいの年輩のもうひとりの人が、声をかけてきた。

二人とも、おそろいの、制服だ。

「ところでお客様、よく寝てたみたいだけど～。この部屋は、朝七時から十時までは、一旦閉鎖して掃除をしてるんですよ～」

「…え。…あ、…」

気がつくと、昨夜あれだけみっちりごろごろとしていた沢山の女人たちの姿は…

ない。

「お風呂は今の時間は露天風呂だけ掃除中だけど、他はもう入れますからね～。お帰り前に、ゆっくり身支度なさって下さいね～？」

慣れた風に滑らかに案内しながら、言外に、

「早くどいてくれないと、掃除ができません～」と、

失礼にならない程度に、追い出しにかかっている…？

雰囲気からすると、こういうことをやらかしてしまう客はよくいる感じで、ちょっと迷惑かもだけど、そんなに怒られているわけでは、ない？ らしい…？

「す… すいません…っ」

章子は紅くなりながら、抱えていた小荷物の袋と、ロッカーの鍵もちゃんと持っていたことを確認して、慌てて休憩所から出た。

*

言われた通りに浴室へ向かうと、他の女の人たちも結構たくさん、時計は片目で気にしながらも、だけど、のんびりした雰囲気で。

ばしゃばしゃとか、シャワシャワとか、身支度の朝風呂をしている。

(...こんな時間に大きなお風呂に入ったの、初めて...?)

もうすでにかなり高く昇っている朝陽がきらきらと、露天との間を仕切る大きな窓ガラスの壁から金色に斜めに射しこんでいて、湯気が白くふわふわと踊りまわっていて、本当に天国? のようだった。

露天風呂のほう確かに『清掃中』という黄色い立て札が置かれて、数人がかりでせっせと掃除をしている。

(...楽しそうだな...)

立ち働いている人たちが、お互いに声をかけあって、仲良くてきぱきと作業を進めている様子が...

なんだか、うらやましい。

館内放送は、この店は二十四時間営業ではあるが、午前十時に一旦閉めてレジを精算? するので、昨夜からずっと居続けている人、今日の日中も滞在していたい人は、午前十時までに一度、玄関前のフロントまで来て、お金を払って下さい... みたいなことを繰り返し賑やかに案内している。

時計を見ながら、のぼせない程度にゆっくりお風呂に浸かって、髪も洗って、さっぱりして、のんびりドライヤーを使って。

それから思い出して、慌ててコインランドリーまで服をとりに戻った。

乾燥機に移して回したまま忘れて寝てしまっていた服は、誰かが(たぶん係の人が)畳んでくれていて、空いた籠に「置き忘れご注意下さい」という札を載せられて、きちんと置かれてあった。

(...うわ~、ここでも、また、迷惑?かけちゃった...??)

章子は身がすくむ思いがしたが。

きっとたぶん、この天国のような、優しくて明るい場所では、そのぐらいのことでは、誰も章子を殴ったり罵ったり...

しない?

昨夜ラーメンを食べた食堂はこの時間はまだ開いていなくて、軽食スタンドで食べて下さいと案内された。

...高かった...。

一番安いトーストセットだけ頼んで、急いで食べて。

歯を磨いて、トイレを借りて、身支度を済ませて...

他の人達の列にまぎれるようにして、フロントの会計の順番に並んだ。

家族連れや恋人同士? や友達集団のほかに、ひとりで来ているらしい女の人も男の人も、他にもたくさん居た。

さすがに中学生で一人で泊まったのは章子くらいじゃないかとは思ったが、高校生や大学生くらいの女子ひとりのお客さんは他にも何人もいて。
お店の人も、ちょっとだけ困ったような顔で章子の年齢を踏みみするような表情はしたけれども、特には何も言わないで、普通に清算してくれた。
が。

.....高かった..... !

(...地獄のサタンも金次第、ってよく言うらしいけど...
...天国も、お金、かかるんだ...?)

昨日の夕方、あの高台の公園で、「一日千円ずつとか節約して使えば、秋までぐらは生き延びられる?」と、余裕で、計算したはずなのに...
昨日一日で、新しい服を一揃い買って、海までの電車代を払ったせいもあるけど...
お風呂に入ってご飯を食べて、一晩ゆっくり「泊めて」もらったら...
一万円札が、一日で一枚!
もう、無くなってしまった... !

(...じゃ、...このペースじゃ、あと...、一週間とかくらいしか、...生き延びられない...!
ってこと...??)

朝風呂で湯あたりしたせいもあるのか、ちょっと貧血を起こした感じがして、目の前が真っ暗になって。
...「地獄に、引き戻される!」
恐怖と、寒気と、絶望感がして...
へたりこんで...。
お風呂の前の一休みベンチで、しばらく座ってぼんやりしていた。

「...お客さ~ん! 乗らないの~?」
運転手さんから、声をかけられた。
どうやらそこは、「無料送迎バス」のバス停のベンチらしかった。
「...あ...っ 乘ります~!」
章子は何も考えていなかったので、とりあえずバスに乗った。
最寄りの私鉄の駅の前まで、十五分ほど走って、降ろされた。
そこからまた、海に向かって歩いた...。

*

日曜日で、晴天だった。

太陽はもうかなり高くなつていて、ほぼ真正面から、きらきらと照りつけてきていた。
しばらく考えて、悩んで、迷つてから…、
道沿いのスーパーの店頭で安売りしていた夏の帽子と、一番割安になると計算して、二
リットル入りの大きな水のボトルを買った。
ごくごくと仁王立ちで巨大なペットボトルのお水を飲んで、帽子をきっちりかぶつて。
また、歩き始めると、気分はかなり明るくなってきた。

海へと続く国道沿いには車もたくさん走っていたけれども、気持ちのいい風が排ガスを
吹き飛ばしてくれているので、暑くもなく、乾燥していて、汗をかいても、すぐ乾く。
水は大きなボトルで買って、正解だったと思った。
かなり重たかったけど、海につくまでには無くなりそうな勢いで飲んでいたし、道沿い
を軽快にジョギングやウォーキングで行き交っている人たちも、みんなそれぞれの大き
なボトルで、ごくごく気持ち良さそうに飲んでる。
「立ったままラッパ飲みなんて、お行儀悪い！」
…とか。
誰も、章子を一方的に喧々と叱り飛ばして、
「罰として夕飯抜きよッ！」なんて、叫んだり、
しない…。

…なんだか、やっぱり、愉しくなってきた…。

章子は、ゆっくり、まっすぐ、海へと…
歩いた。

六. 2日目。(午後)

六. 2日目。(午後)

海に着いた。

海岸は、ほどほどに混みあっていた。

まだ泳ぐには早かったけれども、沖合にはサーフボードやウィンドサーフィンの人たちがこれでもか！ という勢いでひしめきあっていたし、波打ち際は水遊びに興じる子どもや大学生たちで、いっぱいだ。

割り込んでいく気にもなれなかったので、章子は砂浜と国道の境になっているコンクリの段々の真ん中へんに腰を落ち着けて、ぼんやりと波の音を聴きながら、広い広い、太平洋を…

眺めた。

少し暑いくらいに暖かくて。

空気はもやっとした海辺の水蒸気と、気持ちの良い大洋からの乾いた風が交互に吹き渡っていて。

陽射しは燦燦として、ほぼ真上。

国道を行き交う自動車の音の五月蠅さと、砂浜で遊びまわる家族連れや友達グループの楽しそうな大騒ぎが、潮騒の音すら打ち消す勢いで…。

…誰も、喧嘩もしていないし、罵ったり、殴ったり、家族を強姦したりも…
していない。

…ここは、やっぱり、天国に近い場所？

だった…。

海辺の光景の一部のなかに自分が、ジグソーパズルの一ピースになったかのように嵌まり込んでいると。

もう、ここで死のうとか、そういう気分は、
どこかへ行ってしまった。

(…働く。って、出来ないかな…?)

鬼父や鬼母に、あの地獄ですっと言われ続けてきたことは。

とにかく真面目に必死で徹夜してでも勉強して勉強して、良い成績をとって、良い高校へ進学して、良い大学へ行って、良い会社に入って。

良い人を見つけて、さっさと結婚しなさい。

…と、いうことだった。

中卒とか高卒とかで、お掃除とか、そういう仕事に就く人たちは、「落ちこぼれ」で「人生の敗残者」だと…

いうことだった。

でも。

さっきのお風呂の掃除の人たちは、みんな朝早くからきちんと制服を着て真面目に出勤ってきて、仲良く楽しそうに、せっせと立ち働いていた。

確かに大学へ行くほどの勉強は、必要そうになかったけれども。

だからこそ、ああいう仕事なら、今の章子にだって、できるんじゃないかなと思う。

(…せめて、高校生だって、…嘘、つけないかな…?)

家出してきた宿無しの中学生では、どこも雇ってくれないだろう。

ということは理解できた。

でも。

(お金は、使うだけだと、すぐに、なくなっちゃうだろうし…！)

働きたい。

切に、思った。

*

「…お嬢さん？…お嬢さ～ん！」

気がついたら、また、そのまま横になって…

海岸で、寝ていた。らしい…。

懐中電灯を持ったおじさんに起こされて、びくっとして、飛び起きた…。

無意識のうちに、胸を隠して、身を丸くする…。

「…よく寝てたね～。もう日が暮れたよ～。

暗くなると、ここも危ないから、早めに帰んなさいね～？」

…おじさんは…

…無防備に、Tシャツ一枚で、外で寝ていた女子中学生に、何も、

「悪いコト」を、しようすら、せずに…

にこにこ笑って、声だけかけて。

章子が起きたのを見届けると…

そのまま歩いて行ってしまった。

あちこちでゴミを拾ったり、巨大すぎる砂のお城と「まだまだ！」と格闘している小学生たちに、「早く帰んなさい！」と声をかけたり…

しているだけの人。

(地域ボランティアとか、そういうのかな？)

らしい…

(…海沿いって、やっぱり、天国に、近いの…？？)

今までずっと生まれて育った山間の盆地の地方の中堅都市の、章子のまわりに居た大人人たちとは、何もかもが違っているように…思えた。

(海に近い… 天国って言うと… ニライ・カナイ…？)

何かで読んだ知識が、ふっと脳裏に浮かんだ。

(…そうだ…！ 沖縄だ…！)

たしか、いじめで不登校になって高校を辞めて、自転車で日本一周の旅に、出た人の、本を。

読んだことがある…。

(沖縄って…！ 高校生なら、家出してても、たしか、働けるんだ…！？)

章子の知識は、ちょっと間違っていたかもしれない。

ただ、子ども、一人で…もちろん、その人は章子とは全然まったく境遇が違っていて、理解のある親の、応援と許可と、費用の提供もあったけれども…

自転車で日本一周に出た「高校を辞めた」子どもが一人で…

九州の南まで走って、そこから自転車と一緒に船に乗って…

南の島で、サトウキビを刈り取る仕事に就いて、続きの旅費を自分で稼いだくだけは…なんとなく、思い出せてきた。

(なんとか、歳を誤魔化して、高校を辞めた不登校児で、十五歳は過ぎてて、親の許可もあります！…って、ここにできれば…！)

沖縄なら、暖かいから、冬でもキャンプ場で安く暮らせる。

そういう世界中からの旅仲間が、沢山いたと…

読んだ、気がする…。

(.....歩こう！)

とりあえず、海岸沿いに...
九州まで。

何とかお金を工夫して、生き延びて、歩いて、
フェリーに乗って...

沖縄の、キャンプ場に泊まって。
歳を誤魔化して、サトウキビ畑で、働かせてもらおう...！

まだ残っていたペットボトルの水を、ごくごくと飲み干して。
夕焼けの最後の輝きが残る国道沿いを、西をめざして。

章子は、歩き始めた...。

七. 2日目。(深夜)

七. 二日目。(深夜)

…認識が、あまかった。

…ということは、歩き始めてしばらくして、すぐに気づいた。

夏至前の空梅雨の土曜の夜の湘南海岸は、日が落ちてからもずいぶん人が多かったけれども。

どう見ても未成年なのに酔っぱらっているらしい男の子たちの集団に、あっという間に取り囲まれて絡まれて、

「いくつ?」「可愛いね」「せっくす!」

「おっぱい触らせて!」「一発やらして!」

…なんていう卑猥な言葉で四方八方からガンジガラメにされて。

心が、殺されかけた。

「…ひっ…！」

章子は叫んで、蹲った。

恐怖と絶望のあの日々の、おぞましい、感覚を…

思い出してしまって。

声も出せないほど青ざめて、がくがくと…震えた。

眼がくらみ、冷や汗が出てきた。

犬を連れた家族連れの散歩中の人たちが気がついてくれて、男の子たちを怒鳴りつけて、追い払ってくれた。

「だいじょうぶ? ひとりで帰れる?」

小学生の子どもたちのお母さんらしい人が、心配して腕をとって立ち上がらせてくれた。ぱさぱさと、優しく、服についた砂を祓ってくれる…

「もう暗いからね～。女の子ひとりで海岸にいたら危ないわよ。

上の道路沿いを歩いたほうがいいわ?」

(…やっぱり、あの地獄のドンゾコみたいだった場所よりは、天国に、近いよね…??)

章子は立ち直れる気がした。

深呼吸しているうちに、震えは収まってきた。

お礼を言って、また歩き始めた。

「…あら、逆なのね？ 一緒に方向だったら、良かったんだけど…」

よその家の女の子のことなんか心配したって何の得にもならないのに。

非行なら警察に通報するとか、厄介ごとを起こされたら迷惑だとかじゃなくて、本気で…

心配してくれる大人が、いる。

(じゃあ、もう少し… 生きのびて、みよう…。)

しかし。

土曜の深夜の海沿いの国道の…

歩道を歩いていると、次々に車が寄せてきては止まった。

「お嬢ちゃん、ひとり～？」

「乗ってかな～い？」

「イイコトしようよ～？」

…無視！

下を向いて、カバンを胸にしっかりと抱えて、どんどん歩いていくと。

たいがいの車は、

「…チッ！」とか、

「すかしてんじゃねーよ！」とか、

「なんだよ、ドブス！」

…とか、勝手なことばかり言い捨てて、諦めて走り去って行く。

けれども。

外国人らしいの男の人たちがぎっしりと何人も乗っている車が、音もなくすっと章子の歩いて行くすぐ前の路肩に寄せてきて、停まった。

ドアを半分開けて、上半身だけ乗り出してきた、ちゃらい感じの男が、腕時計と地図を振り回しながら、カタコトの日本語で、

「スミマセ～ン、チョト、オシエテ～！」と、

困っているような様子で、叫ぶ。

…迷子なのだろうかと、一瞬、油断した隙に。

がっつと！ 腕を掴まれて。

車に！

…連れ込まれそうになった…！

必死で。

暴れた。

「…何をしてんだッ！」

通りすがった自転車の高校生が、怒鳴りつけてくれた。

暴れている章子を道路に突き飛ばして落として、

車は、乱暴に走り去った…。

「…怪我した？」

「いえ…」

ぶつけたり、すりむいたりは、していたけれども、

章子は震えながら立ち上がった。

さっき海岸で絡んできた男の子たちと、同じ制服だ。…怖いッ！

…逃げなければ…！

自分のことまで警戒しているらしい章子の様子に気づいて苦笑して、

「…気を付けろや。このへん夜中は危ないから」

男の子。なのに…

章子を心配する声だけ残して、自転車は何も悪いことをせずに、走り去って行った…

章子は、拍子抜けした。

でもそこへ、今度は、聴き間違えようのない暴走族の暴れる騒音と…

「そこのバイク、停まりなさ～いッ！」

叫ぶパトカーらしいマイクの音が、遠くからこちらへ向けて、真っ直ぐにやって来る…

(…この道は、危ない！)

章子は、次の信号まで走って、急いで渡って。

脇道の小さな商店街の方向へと、逃げた。

海岸の国道から直角に曲がる形で続いている商店街をしばらく北上していくと、駅前の繁華街に着いた。

そこでほんのちょっとだけ休憩して百円のシェイクで喉を湿らせて百円のハンバーガーだけ食べて、トイレを借りて気を落ち着ける。

章子はまた、線路沿いに続く、細いけど街灯がちゃんと点いている明るい道を選んで、

…西に向けて、歩き始めた。

*

歩いて歩いて歩いて行くと、帰宅中の同じ方向の人の姿が途絶えて。

またかなり歩くと、今度は向こうから歩いて来る人の数が増えて来て。

しばらくまた歩いて行くと、次の駅に近いほうの商店街の外れの、明るい場所に着く。

そんなふうに何駅分かを歩いて行くと、本当の深夜になってしまって、開いている店はところどころのコンビニと、ピンクや紫色の看板の怪しきな呑み屋さんだけ。という時間帯になった。

章子は疲れてきた。

でもお金はないし、大きなお風呂屋さんも見当たらないし、どこにも行くアテがない。

小さな公園が目についた。

そ～っと入ってみた。

周りの民家はもうみんな寝付いている風で薄暗いけれども、常夜灯とか玄関灯などで、手元が見えるくらいには、明るい。

用心深くあたりを見回してみたけれども、だれも章子を見ている人は… いない。

そ～っと。そ～っと…、

公園のすみの、赤いタコ型の遊具のなかの、トンネルを覗いた。

ずっと前に章子の家の近くのこういう場所で、何日かホームレスの男の人が寝泊まりしていたところを見つかって、近所中のオバサン達が大騒ぎで警察を呼んだことがあった。
「…あ～あ。寝心地が良かったのに…」

なんでもないことのように小汚いオジサンは呟いて、荷物をさっさとまとめると、おとなしく追い払われて去った。

あんなふうに…

潜りこんでみた。

案外、居心地が、良かった。

ジャージの入っている袋を枕にして、章子は、眠りについた…。

あまり寒いとは思わなかったけど、けっこう蚊に喰われた。

夕方に海岸沿いでせっかく気持ちよく目が覚めたのに…

そのあと何度も怖い目に遭ったせいで、あんまり眠れなかった。

八. 何日目？

八. 何日目？

明け方に、すぐ枕元を走りぬけて行った新聞配達のバイクの音で。
びくっとなって飛び起きて、頭をトンネルの天井にぶつけて。
『眼から火花が出る！』という痛さを… 実体験した。
「あたたたた…！」
呻いているうちに、次には牛乳配達のトラックのかちやかちや音が通り過ぎて行って。
章子は、自分の今いる場所が裏の家の玄関先から丸見えだと気がついて慌てた。
急いで這い出して、公園のトイレを借りて、顔を洗って歯を磨いてペットボトルにも水
を満タンに詰めて、
歩き始めた。

*

日曜日だから今日は大人に見咎められる心配はないなと思って、一日のんびり西へ西へ
と歩いた。

夕方早目の時刻に、道沿いにまた大きなお風呂屋さんの看板があるのを見つけた。
今度はゆっくりじっくり料金表をよく読んで、「土日は高い」ということと、
「夜十一時以降までいると別料金が加算されて値上がり」するけど、
「その前に帰るなら昼のあいだ何時間いても同じ料金で割と安い」と知った。
それから入ろうかどうかと玄関前でうろうろしているうちに、この先の西へと続
く国道沿いにも何か所もチェーン店がることが判ったので、地図の乗ったチラシだけ握
りしめて、ほくほくしながら、今日は店には入らないことにして、歩き始めた。

歩きながら、いくつか作戦を考えた。
家出中だと、ばれたらまずい。
お金はなるべく節約しないと、沖縄に着くまで？ 生き延びられない。
でも何日もお風呂に入らなかったら、一目でホームレスと判るくらい汚れてしまう。

だけどコインランドリーは、お風呂の中のやつより、街中のお店のほうが安い....。

道沿いの百円ショップで小さな目覚まし時計と大学ノートとシャーペンと、古本屋の50円のコーナーで大学受験の参考書と、『東海道！ 銭湯・スーパー銭湯・日帰り温泉』とかいうガイドマップを買った。

それから「いかにも地元の人」に見えるように、安っぽいペラペラの寝間着ジャージとTシャツも、格安のセットを見つけて買った。

これだけで一日の予算「千円」を使い切ってしまったけれども。

御夕飯は閉店間際のスーパーで半額シールの貼ってあるうちで一番大きなお弁当をひとつ買った。二百円ちょっとで満腹サイズだ。

駅の待合室で塾帰りの子どもが遅い帰宅電車を待ってるような顔をしながら、がつがつ食べた。

トイレを借りて、歯も磨いちゃって....、

また、歩き始めた。

夜更け...

手頃な公園の、小さなベンチの影の、植え込みの下で寝た。

明日は、蚊よけスプレーも買ってこよう。

...と、固く決意はしたけれども、昨夜よりは安眠できた。

*

夜明け。

新聞配達のバイクの音を目覚まし代わりに、ジャージの中学生の朝ジョギングです！

というふりをして...

西へと、走り始めた。

走ったり歩いたりして、少しかなり疲れてきて。

今日は平日の月曜日だから、中学生が街をふらふらしているわけにはいかない時間が近づいてくる前に、どこかの駅前のファーストフードの店の二階の禁煙席の一番外れに、そっと座った。

百円バーガーひとつと百円コーヒー一杯で、何時間、粘れるかな...？

店内だけど、深くフードをかぶって、中学生の顔を隠して。

昨日買った大学受験の参考書とノートを開いて、

「十八歳の浪人生が、まじめに受験勉強してまーす！」という偽装をして。

「うっかり寝込んだ」ふりで...

テーブルにつっぷして寝ちゃう。

…けっこう、長いあいだ、起こされなかった…。

午後二時を過ぎたら、もう顔をさらして中学生が町を歩いていても、大丈夫だと思う。西へ、西へと歩いた。

ガイドマップで目星をつけておいた東海道沿いの古い古い銭湯に、夕方早目に入った。

さっぱりお風呂に入って、安っぽい「寝間着ジャージ」に着替える。

脱衣場のすみの畳の休憩スペースを占領して、またしばらく、ぐうぐう寝ちゃう。

目覚まし時計で素早く起きて、もういっかい頭を洗って、閉店準備が始まる前に、さっさと店を出る。

閉店間際のスーパーで半額のお弁当を買って、どこか適当なところで食べて。

またしばらく歩くと、深夜の街道沿いに、大き目の無人のコインランドリーがある。

服を洗いながら備えつけの漫画なんか読んで時間を潰して、

深夜になったら、また歩き始めて…

手頃な物陰に潜りこんで、眠る。

そんなふうな日々が、始まった。

*

けっこうスリリングで、緊張するけど、解放感もある愉快な…

冒険の？ 日々で。

毎朝無事に？ 目が覚めるたびに、

(ああ… 良かった。今日も、生き延びられた…！)

と、思った。

あの地獄の家に縛られていた何年もの長い半生の間は、一度も感じたことのない、歓びだった。

洗濯とお風呂は一日千円という予算を決めると毎日は無理だったので、二～三日にいっぺんにして節約することにした。

ジョギング途中の体育会系のような顔をして公園の水道を頭からかぶってざぶざぶ洗うと、案外平気なようだった。

そんな風にして何日か、何週間かが過ぎた。

細切れの睡眠で、日付の感覚はなくなってしまった。

今が何日かも分からなくなつたけど…

家を出たあの日から、とうとう一万円札が合計四枚、

無くなつていた…

九. 海辺の街。(一日目)

九. 海辺の街。(一日目)

例によって百円のシェイクと百円のハンバーガーだけで、午後の出歩ける時間帯になるまで粘るつもりで入った、名前も知らない小さな駅の、名前も知らない小さな商店街の、全国同じような造りのファーストフード店の二階の禁煙席の片隅で。

手元に残った三枚の一万円札と、千円札と小銭の数を全部。

もういちど数え直して、章子はため息をついた。

一万円札が四枚なくなるまでに、約一ヶ月かかった。

残りの三万円ちょっとで同じように歩き続けるとしたら、あと一ヶ月、もたない計算になる。

おこづかい帳を付けておくべきだったか？ と、ちらっと思ったが、いつだって、本当に必要だと思ったことにしか、殆ど使わなかった。

(たまに、どうしても、雨の深夜に歩くのが嫌で、高い日にスーパー銭湯に一泊してしまったり…を、無駄使いと考えるかどうかは、今さら悩んでも意味がなかった。)

そして一ヶ月で歩けた距離と、きたら…

とてもではないが、あと一ヶ月しないうちに沖縄とか、せめて九州の途中までとか…

…絶対に、無理。(笑)

東海道五十三次と言うからには少なくとも東京から大阪までは中学生の脚でも二ヶ月も歩けば着くはずだと考えていたが。

昔の大人の男の人は、きっと今の章子の倍くらいの速さですたすた歩けたんじゃないかと思うし、おそらく朝は日の出の前に起き出して、日暮れまで一日ずっと、黙々と歩き続けていたんじゃなかろうか。

そして夜はちゃんと宿に泊まって、ひと風呂浴びて美味しいご飯をたらふく食べたら、何の心配もせずに屋根の下で朝まで熟睡して、鶏の鳴き声なんかで健全に、夜明け前に起こされるのだ。

対するに章子ときたら家出してきた中学生だとばれないように、そして通りすがりの男の人たちから乱暴されるハメに陥らないように。

人目を避けて、時間を限って、早朝と夕方と夜は早めの時間帯だけで、細切れに。しかも連日の野宿でびくびくして眠るせいで疲れが溜まりきっていて、背中を丸めて小股でのそのそ歩くから、きっと昔の男の人たちの半分か、それ以下くらいの、のろのろペースではなかろうか。

それとも『東海道』って東京から大阪までじゃなくて、東京から名古屋までとかのことだったんだろうかと、次に図書館を見つけたら立ち寄って調べてみよう…と思いつながら。記憶にあるかぎり出来るだけ正確に、受験生のフリ用に買ったはずが日記帳か雑記帳のようになっている大学ノートに、日本列島の形を書きこんでみていた。

そもそも現在地がどこなのかも正確には分からなかったが、まだまだ関東と名古屋の間のどこか、(それでも一応かなり、西のほう?)…だ。

歩けただろう距離と、だいたいの日数と。

使った金額を、割ったり掛けたりしてみる。

…無理。

(苦笑+溜息)。

(…どうしよう…)

…どうやって、生きていったらしいの…??

まとまらない考え方と不安と、大人に見つかって捕まつたら、またあの地獄に連れ戻される!…という恐怖のせいで、ハンバーガーひとつでは全然足りない! とさっきから訴えている空っぽ同然の胃袋が…

きゅっ!…と、締め付けられて、痛くなつた…

(よそう。)

お金は、使うだけなら、なくなる一方だし。

どうがんばって歩いても、これ以上は…

速くはならない。

まともに一晩とか、まとめて眠る機会がほとんどないので、章子はとことん疲れきっていた。

(どこかで、住み込みで、働かせて、ほしい…!)

とにかく、ちょっとでも、仮眠してから考えよう…と。

店のテーブルに突っ伏して寝入る体勢を整えようとしていたら…

眼下の駅前ロータリーに。

ちょうど到着した、何かの臨時特急のような、この辺では滅多に停まらない「長い」列

車から。

わらわらと、駆けだしてくる…

小学生！

中学生！

幼稚園生とかを抱えたり、

ベビーカーを押したりしている…

大量の、…家族連れ！

…？？？

(…あっ！)

…と、章子は驚いた。

カレンダーは買ってなかったので、日付が判らなくなっていた。

今日から、夏休み！

だった…。

*

それでもせっかくだから、と、お店の片隅で三～四時間くらい、突っ伏して眠った。

うとうとしながら片耳で、駅のホームから響いて来るアナウンスを拾っていると、特急の臨時停車～！ とか臨時増発の快速電車は何番ホームに到着～お間違いのないように～！

とか…が、二時間に一本くらいか？ もっと？

頻繁に停まっているらしい。

駅前にあふれだしてくる人の波の服装とか荷物を見ていると…

すぐ近くにかなり大きな、海水浴場が、…ある、らしい…？

うずうずしてきて、章子は予定よりはかなり早い時間帯に、店を出た。

人波に紛れて、みんなが目指す方向に…

あるいた。

わくわくしてきた。

からりと乾いた陽射し。

遠くから漂ってくる、はっきりした磯の香り。

駅前からまっすぐ続くアスファルトの道は両脇の歩道の幅がやけに広くて、それでもまだ狭い！ という勢いで、いっぱいに溢れかえる、人波…

途中の喫茶店や海鮮料理屋さんや、威勢よく立ち並んだ焼きそばやカキ氷や綿菓子の屋

台の前で、早々に一服している人たちも含めて…
笑顔と歓声で、満ち溢れている。

(うわ… また、『天国に近く』なったあ…！！)

東海道中とはいえ険しい岸壁に急峻な山々が迫る中山間地的な地形だった途中の片田舎の駅をいくつも通り過ぎたあたりでは、『見知らぬ』『ヨソモノ』の章子を見咎めて警戒したり通報したりするオトナたちが多くてものすごく苦労して、かなりこれはまた『地獄に近づいた』と思った苦労の日々の後だったので、章子は嬉しくなった。

道中のお店で、えい！ という勢いで、それでも一番安くて色気はあるでない、オバサンみたいななすんどうウェストの、紺色の水着を買った。

海に着いた！

いっぱいに… 人！ 人！ 人！
…子ども！

値段の高い『海の家』の群れの前を延々と通り過ぎ、きょろきょろしながら歩いた挙句に、無料休憩所、という隅っここの公立施設をようやく見つけた。
家族連れでごったがえしている片隅の隙間をみつけて、いそいそと着替えて…

…海！

いやいや、ちょっと待って…！
と、自分に声をかけて、ちゃんと？ 準備体操をして… いそいそと、波に分けいった。

…海！

…で、泳ぐ。のは、本当に。
何も、まだ知らなかった、小さかった子どもの頃…
以来？

海！
波！

(…………おばあちゃ～ん…………！！)

あれは… 北関東の…

それとも南・東北の…

東向きの、海だった…

章子は、ようやく、なぜ自分が、

「死ぬなら、海を観てから。」と思ったのかを、思い出した。

あれが、最後の夏だった。家族が、地獄になる、前の…

あの葬式の、前の。最後の、最高の…夏。

*

ぼんやりしながら、何も考えずに、ただひたすら。

波をかきわけたり、泳いだり、浮かんだり。

砂浜に寝転んで、昼寝したり…

していた。

午後も遅くなり始めると、小さい子どもを連れた家族は、早々に帰り仕度を始めた。

その一方で、またまたまだどんどんと、砂浜につめかけてくる、やや年齢が高めの子どもを連れた大人たちや、地元民らしいはしゃいだ中高生や、帰省中か旅行中の大学生らしい賑やかな集団や…

(…女子ひとり…で、遅くまで砂浜にいたら、また、危ない…！)

章子は気がついてあきらめて。

三分間無料の公設の水シャワーに順番待ちで並んで慌ただしく浴びて、着替えた。

ゆっくりと引き潮のよう駅や街へ向かって歩いていく人の波にまぎれた。

道中、脇道にそれで行く人たちは…

あちこちの、「民宿」とか「ホテル」とか「旅館」とかとか…の看板に、

「ただいま～！」と声をかけては、広い玄関に入って消える。

(いいなあ…)

章子は思った。

どこかに、今晚、潜りこんで眠れる場所を…

見つけなければ、ならなかった…

が。

海側はこの時季ずっと夜遅くまで人出で賑わっているようだった。
何かと思ったら背後で、すぱぱぱぱ～ん！ と、物凄い音がして…

花火大会まで始まった。

もちろん、歓んで最後まで観てから…、
また歩き始めた。

焼きそば屋は高い。

お好み焼き屋も…高い。

地元民御用達のスーパーの総菜売り場は…

花火大会用の高い、揚げ物とかツマミものの大きいセット。
ばかりになっていた。

(…おなかが減った…)

章子は、歩いた。

みじめな気分に、なってきた…

歩いた、歩いた…

一時間か、もうちょっと…

隣の駅に、たどり着いていた。

*

かなり大きな、街だった…！

各駅停車の列車が着くたびに、隣町の花火大会から戻ってきたらしい楽しげな人波が
どっと溢れだしてきては、各方面にわさわさと、賑わいながら消えていく。
海岸から直通の臨時バスも次々到着して、どかどかと吐き出された人たちは、また次々
と、家路へと続くバスやタクシーに乗り換えては去って行った。

これだけ大きな街なら、どこかに潜りこんで、しばらく休めそうだ…？

章子は期待したが、しかし困ったことに、これはと思う公園とかの物陰には、花火大会
帰りの友達グループとか恋人同士とかに… 占領されていた。

章子は眠る場所もなく、食べるものもなかった。

みじめになった。

…と。

駅前の繁華街からはかなり歩いた、住宅街のふちに。

閉店間際の大きなスーパーがあった！

ふらふらと入ると…『半額』！

と、大きなシールの貼られた大きな、『花火弁当』とやらが…！

まだ、いくつか残っていた。

残業帰りらしい会社員や兼業主婦の人たちと争うようにして一つ確保して、いそいそとレジに向かった。

(どこか、座って食べられる場所を…！)

と、思ったら、スーパーの後ろがかなり大きな『市民公園』になっていた。

花火帰りの子どもたちがまだあちこちに居る。

(これなら！)

章子は悦んで、隅っこベンチに座ってお弁当をがつがつ食べた。

満腹できたら、かなり気分も大きくなってきた…。

(どこか隅っこで、こっそり眠れそうよね…？)

どうせ沖縄までは、いくら歩いてみたって、着けやしないんだし…。

明日もう一度、海まで歩いて、ひと泳ぎしてこよう…！

何日か、ここでゆっくりしてみるのも、良さそうだった…。

ちょうどいい物陰だったので、誰にも見られていないことをよく確認した上で、こっそりと潜りこんだ。

虫よけスプレーを節約しながら使って、ぼろぼろになってきたリュックを枕に、ゆっくり、眠った…。

十. 海辺の街。(二日目)

十. 海辺の街。(二日目)

いつものように、新聞配達のバイクが走りぬけて行く音で、びくっと目が覚めた。

もちろん夜明け前だが、東の空はもう明るい。

いつものように、すっかり慣れっこになった公園のトイレを借りての洗顔と歯磨きを手早く済ませると。

いつものように、部活の朝練前の自主トレ早朝ジョギング学生のフリを装って、章子は、たったかとたったかと…、

今日だけは今までと違って、昨日きた道の方向をめがけて、逆戻りで走り始めた。

海へと走る道沿いの、空はどんどんと耀くなっている…

みごとな朝焼けの、東の水平線の金と朱色のグラデーションの帯から、西の濃紺の空にゆっくりと、白い月が傾いていくところまで…を、一望に見渡せる川沿いを走って。

まだまだ人けの少ない超・早朝の海岸べりに小一時間ほどでらくらくと走り着いた。

こんなに自分が走れるなんて！ と、章子は自分で驚いた。

一ヶ月、歩き続けたおかげで、ひよわで運転な自分でも、ずいぶん、筋肉が鍛えられたらしい…。

Tシャツと短パンはさっさと脱いで、ちゃっかり下に着こんできていた水着一枚で、ひやっほう！…と。

まだほとんど貸し切りに近い海水浴場に一番のり！…という勢いで飛び込む。

見渡すと、海岸沿いのあちこちで、「このへん一番乗り！」と駆けこむ子どもや学生や…が、結構たくさん居て、さらには沖合には、すでにウィンドサーフィンの帆がかなり、立ち並んで行ったり来たりしている。

天気は快晴で、海風は穏やかだった。

章子は心ゆくまで、「ほぼ貸し切り」の朝の海を、泳いだり浮かんだり、砂浜で遊んだり、貝を突つたり魚を眺めたり…して、の～んびり！ と、…「夏休み」を楽しんだ…生きてて良かった！

…と、しみじみ思った。

こんなに、世界が、広くて、

美しいなら…

…野宿しても、

…お腹がすいても！

がんばって、生き延びてみる、

価値はある。

…………よね…………？

*

七時を過ぎると、大人に連れられた小さい子どもたちも次々と海岸にやって来て、気の早い海の家も営業を始めて、トウモロコシを茹でる匂いや、たこ焼きやイカの焼ける匂いが、あちこちから漂い始めた。

章子の胃袋が、健全にぐーーーーーっ！ と鳴った。

海べりの砂浜の場所は子どもたちに明け渡して、道路との境目の石段にバスタオルを敷くと、昨夜のスーパーで弁当と一緒に買いこんでおいた半額のパンを、公園の水道からペットボトルに汲んで持ってきたぬるい水で口を湿らせながら、一度に三つも食べた。
久しぶりの、贅沢？ だった。

日焼けし過ぎないように、もうかなりぼろぼろになってきたパーカーのフードと、その辺で拾ったビニールシートで陽射しを防御して、そのまま海岸線で、しばらく眠った。
午前十時を過ぎると、もう車のクラクションやら場所取りの口論やら子どもたちの喧嘩やら泣き声やらで、眠るどころではなくなった。

章子は苦笑して、小さいリュックに全てを詰め込み直して、また、歩き始めた。

(…さて。どうしようか…？)

もうそんなに頑張って沖縄まで歩かなくても、夏のあいだ、ここの街でなんとか居場所を見つけて、しばらくのんびりできないだろうかと、思った。

旅館やホテルが沢山ある。

歳と住所を誤魔化して、高校生ってことにして。

なんとか、住み込みで、働かせて、もらえないだろうか…？？

*

ぼんやりと何も考えない今まで、昨日きた海に一番近い駅へと続く方向へと、海沿いの混雑した国道よりは何本か陸地に入って車の少ない道を、とことこと歩いて行った。

この辺りにもあちこちに生ビールを飲ませる屋台やら綿菓子の機械を構えた駄菓子屋さんやら、海鮮料理屋さんやら土産物屋さんやらサーフショップやらが、けっこう点在している。

お昼の、午後0時の時報らしいサイレンが、長々と… のどかに鳴った。

じゅうじゅうと焼きそばの焼ける、ソースのいい香りが漂ってきていた。

『バイト！ 大・大・大・大至急～募！

午前十一時～午後三時、休み：火曜日

… 今日だけ！… でも可！』

と、でっかーく、…おそらくカレンダーの裏紙かなにかを使って…

手書きでざくざくっと描いて、大急ぎで貼ったらしくて、なんだか傾いている…

ポスターが、目に飛び込んだ。

「おばちゃん、焼きそば五つ～！」

「はーい！」

「おばちゃん、お水もう無いよ～！」

「ごめん！…自分でやってくれるッ？」

「すいませーん、カキ氷ください！」

「はいはいはーい！ ちょっと待ってね～ッ！」

元気に叫びながら、必死の勢いで飛び回っている小柄で可愛い小太りの小母さんが、そのポスターのお店の中に…居た。

四人掛けのテーブルが五つか六つくらいと、カウンター席と、店の前の大きなかき氷器と、生ビールのぶしゅーっとやる機械が、今どきまだ現役で有ったか～！ と章子は思つたくらい、古い古い木造の小さな平屋のお店のなかに、ぴかぴかとひしめいている。

品書きは、焼きそばとカキ氷とソフトクリームの他は、ジュースとかコーラとかと、カレーライスとオムライスとオムソバと、あと簡単そうな定食が何種類か。…だけだ。

「おばちゃん、まだ～？」

「はいはーい！ 今すぐ！」

「さっきから待ってんだけど～！」

「今ね！ 今ね！ すぐねっ？」

「は～や～く～っ！！！」

バイトがどうこう、というよりも、とにかくその小母ちゃんが…
大変そうだった。
章子は、自然に動いていた。

「…あのっ！」
「はいはーい」
「おもてのポスター！…あたし、手伝いますっ！」
「…あらっ？」
小母ちゃんは一瞬だけ、手を止めて章子を上から下まで、眺めた。
「…中学生…？」
「高校生ですッ！…一年ッ！」
章子は強気で言い切った。
この一ヶ月の放浪生活で、嘘は堂々とついたほうがバレにくい。と、しっかり学習していた。
「十五歳は過ぎてますッ！」

「………あら～！助かるわ～っ！
…そこのお皿！とにかく洗ってくれる～ッ？」

そう言いながら焼きそばを持って小走りに調理場から出て来る小母さんに、
「ちょっとこのお皿！濡れてるじゃないのッ」
と、お客様から小言が跳んだ。
「すいませんね～、さっきまで団体さんが来てたもんで、
お皿洗いが間に合ってなくって～…っ」
「…やりますっ」
章子はすぐに手を洗い、スポンジに洗剤をたっぷりふりかけた。

*

…人生、何が幸いするか、解らない…
と、思った。

ずっと学校でイジメラレていたから。
林間学校や調理実習で、いつも皿洗いや掃除なんか、一人でやらされてきた。
二グループ総勢十二人で手分けして分担するはずの、一学年分百人以上の喰い散らかしの食器類をたった一人で下げて洗って、拭いてしまって…を、全部、押しつけられて取り残された時には、さすがに、哭きそうになったけれども…。

おかげで、お皿を早く精確に、ぴかぴかに洗って片づけるのは…
得意だ…！

山盛りのお皿を、どんどん洗って、片端から手順良く拭いて、どんどん棚の上に戻していくと、小母さんは調理と配膳に専念できて、ずいぶんラクになってきたようだった。お皿がひと段落すると、「これあっちのテーブルに！」とか、「この氷三つに苺シロップかけて～！」とか、他の仕事も頼まれた。章子にも、できる作業だった。歓んで、飛び回った。

*

「…………あ～！ 今日はありがと！
ほんとに助かったわ～っ！」

小母さんは滴る汗をぬぐいながら、本当に嬉しそうに、レジに溜まっていた大量のお金計算して黒い小さなカバンに詰め込みながら、言った。

お店はあともう閉める準備だけになってきていて、人の流れは海岸から駅に向かって、たらたらと歩く疲れた顔の家族連れが中心になってきていて、たまにソフトクリームの注文が入るくらいで、中に座って何か食べて行こう…というお客さんは、めっきり減ってきていた。

「…ほら！ 急がないと電車に遅れるわよ！」
残り少なくなっているアイスクリームの平たい冷蔵庫を残念そうに覗き込んでいた小さい子どもがお母さんに引き立てられていく。
「すいませ～ん、焼きそば二つ～！」
「あっごめ～ん！ 今日もう麺が売り切れ！ なんですよ～っ」
「あらら残念… ここもかよ…？」
「ごめんねえ～っ」
小母さんはほくほくした顔で、ちっともごめんとは思っていない声で、ちゃらっと断っていた。

「…少ないけど、今日の分、これでいいかな…？」
章子は驚いた。
千円札が…！ 三枚も…ッ！
「…足りない…？」

「いえっ！ 多いんでびっくりしましたッ！」

「あらそう？」

小母さんはにこにこっとした。

「…それで～、もし良かったら～、あした、とか。も～。…？」

「…来ます！ はいッ！」

章子は全身で叫んだ。

「わあほんと？ 嬉しい～。いつも頼んでた人が、急にダメになっちゃってね～、ほんっと、困ってたのよ～！」

そう言いながら、小母さんは「はい、まかない♪」と言って、最後の残りの焼きそばの、ちょっと冷めかけてるけどまだ十分美味しそうな大盛のお皿を、章子の前にトンと置いた。

「…これ、食べていいんですか…ッ？」

章子のおなかが、再び、ぐ～るぐ～る！…と、派手な音を立てた。

小母さんは笑いながら、お店の片づけに戻った。

章子はがつがつ食べて、残りの冷たいお水も、ちゃんと断ってからもらって、がぶがぶ飲みほした。

「ごちそうさまでした！」

お皿も自分で洗って、ついでにシンクも拭いた。

「あら～、ありがと～っ」

「じゃ！…明日、十一時にまた来ますっ」

ぺこりとお辞儀をして、章子はいそいそと…

店を出た…。

*

(………凄い！)

それは章子が生まれて初めて、自分で働いて、稼いだ金だった。

(………千円札が！………三枚も………ッ！)

一日たった数時間、働いただけで…

三日分の、生きていく為の、大事な、お金が稼げた…ッ！ ♪♪

『…誰が養ってやってると思ってるんだ…ッ』

鬼父が鬼母を殴る時の定番の罵声が、遠く耳の中で、響いた。

『ありがとね～！ ほんっと助かったわ～ッ！』

小母さんの嬉しそうな明るい声がかぶさって、打ち消した。

(…明日も！)

働くなら…

お金が…

貯められる…！？？

(沖縄に…！ 往けるだけの、電車代と船賃が、この町で、稼げるかしら…ッ？？)

章子は嬉しい勢いが余って、もう一度、人けが少なくなってきた夕暮れの浜辺に戻って、海に飛び込んだ。

ぱしゃぱしゃと泳いでいたら、海岸警備の人に、

「もう遊泳時間は終りでーす！」と、叱られた。

夕陽を見ながら、また慌てて無料の水シャワーを浴びて着替えて、隣駅の大きな繁華街へと続く川沿いの道を、片道一時間ちょっとをかけて、…のろのろ、歩いた。

へとへとだった。

今夜は、道沿いの大きなスーパー銭湯に、の～びの～びと…！

泊まった。

十一. 海辺の街。(ずっと)

十一. 海辺の街。(ずっと)

章子にとって生まれて初めての本当の「夏休み！」が、始まった…。

朝は新聞配達の音を目覚まし代わりに公園とかの片隅で起きだして。

素早く着替えて洗面して、海辺まで軽くジョギングして、軽く泳いで。

買っておいた半額パンで朝食にして、軽く仮眠をとって。

午前十一時の少し前に、小母さんの店に出勤。

日中は、とにかく忙しい。

テーブルを拭いて床を掃除してお店を開けて。

ソフトクリームを作って売って、カキ氷を作って売って、小銭を数えて揃えて出したり
しまったり、お札を両替したり。

注文をとて伝票を書いて小母さんに伝えて。

ビールを注いで出して、料理を運んで出して、空いてるお皿があれば素早く下げる。

お会計してテーブルを拭いて、お皿を下げる洗って、拭いてしまって。

時々は近所のスーパーまで、七味だの青のりだのマヨネーズだのキャベツだの長ネギだ
の、どうしても足りなくなった物をダッシュで買い物に行く。

小母さんのお店は夏休み以外は普通の定食屋さんで、主なお客さんは近所の工場や中小
企業の人たち。

だから普段から平日の十二時過ぎから一時ちょっと前まではランチタイムのお客さんが
安くて美味しいお店と知つて詰めかけて来るので、なかなかの忙しさ。

そこへもってきて夏休みには有名海水浴場のはずれの穴場に続く抜け道だと、知つてて
往来していく半地元民の通りすがり客が、どんどんひっきりなしに入って来ては焼きそ
ば大盛り肉増しネギ抜き！ だの、海鮮定食ワサビ抜き出来ればおろしショウガに替え
て！ とか。

どんどん遠慮なく頼んでくるので、もう本当に目が回る。

それでも途中で必ず十分くらい、ちょっと空いたすきを見計らって小母さんはトイレ休

憩を章子にとらせてくれて（自分も何かの隙を見つけては章子に店番を任せられると喜んで、素早く一服して来て）、そんな時には「素早く食べちゃいなさい！」と、ソフトクリームを一つ持たせて、店の裏の椅子に座らせてくれるのだった。

結局、毎日午前十一時午後四時過ぎまで働いて、小母さんは五時間分だと言って四千円も払ってくれる。そしてその日の残りもので美味しい「まかない」を作つて食べさせてくれる。

章子はがつがつ食べて素早くお皿を洗つて、閉店準備を始めた小母さんにきちんと挨拶してから海岸まで歩いて、怒られないように六時ちょっと前までだけちゃちゃっとひと泳ぎして急いで水シャワーを浴びて。

それから、また、隣の駅前まで歩く。
夕焼けが、とても美しい。
よく晴れた日の続く、乾いて熱い…、
夏らしい、夏だった。

*

西日がかんかんに照り付けて来る河原沿いをのたのたと一時間ちょっと歩いて、隣駅にたどり着くころには、もう暑くて暑くて、汗だくになっている。

クーラーを求めて駅ビルあたりを徘徊しているうちに、隣接した地域の市役所の中に駅前中央図書館。という看板があるのを見つけた。

しかも、夏休み期間中はお盆休みを除いて、毎晩九時まで特別開館！ とか…
(…素敵っ♪)

章子はいそいそと入り込んで、座った。

家出娘の身では、貸出カードが作れないのが、残念だったけれども…

閉館ぎりぎりまでに読み終わるやうな薄くて軽そうな本を探しては毎晩次々に読んで、帰る大人たちに紛れて夜の街に踏み出すと。

夏休みを満喫している地元の子どもたちがあっちにもこっちにもたむろしていて。章子が小母さんへの言い訳に使つたように「夏休みだけ親戚の家に来ている。」らしい子どもたちもみんな、一人ぽつんとコンビニで立ち読みしていたり、路上のベンチで音楽聴いていたりする。

その辺のお店なんか覗いてうろうろしているうちに大型スーパーの閉店時間が近づいてくるから、めぼしいお店を何軒かまわって、一番お得なサイズの栄養バランスも良さそうな半額弁当を探して確保して、明日の朝食用の半額のパンも、しっかり買い込む。

駅前広場のすみのベンチでゆっくりもそもそと遅い夕飯を食べて、ほどよく人通りが絶えてきて、でもまだ、子どもが一人で歩いていてもそんなに不審がられないくらいの遅さの時刻に、そーっと…

明るいうちに目星をつけておいた、いくつかの公園の目立たない物陰を、毎晩あちこち渡り歩いて。

人目を避けてそーっともぐりこんで、バイト料で買い替えたばかりの、安いけど新品のお気に入りのリュックを枕に、虫よけスプレーをしゅーっと気前よく使って、また朝まで眠る。

*

毎週火曜日と、朝から雨が降ってた日には、バイトは自動的に休みで。

章子は図書館に終日こもって、わくわくと本を読んで過ごした。

そのままいつのまにか眠ってしまっていても、誰にも怒られなかった。

面白い本を読み漁るかたわらで、合間の時間を使って、章子は調べものもした。

沖縄までの、列車と船の乗り換え経路と、所要時間と、必要な切符代。

これは、時刻表、というものを始めて読んでみて、もっと早くに調べれば良かった！ と思った。

夏休み（と冬休みと春休み）の間だけ使える、特別な格安切符というのが、ある。

各駅停車のJRにしか乗れないけど、とにかく一日二十四時間かける五日間、乗りっぱなしで、乗れる。

これ一冊買ったら、乗り継いで、乗り継いで…

余裕で、九州の南端まで行ける。

そこから船に乗り換えて…

行けば… 沖縄には…

島が、沢山、ある…。

このどこかで、仕事を。

今度は、できれば、住み込みで… 働ける、場所を。

…探すのに、いま小母さんの店でバイトしているのはきっと役に立つだろうと思った。
せっかくだから、夏休みの最終日が近くなるまで、小母さんの店で働かせてもらおう。
(毎年、子どもたちが「宿題が…終わってないっ」と叫びだす頃になると店は暇になり、
バイトも要らなくなるという話だった。)

その最後の日の夜に切符を買えばまだ間に合うから、夜明けを待って、始発に乗って、乗り継いで、乗り継いで…
もし途中で大人に見咎められたら、「私立の高校なんで九月半ばまで夏休みなんです～これから家に帰るところです～！」と。
嘘について、切り抜けよう。

同じ嘘で、
…沖縄行きの、フェリーに乗って…
あとのことは、向こうに着いてから、考えよう。

(…小母さんに貰ったバイト代がた～くさん！ あるから、仕事が見つかるまで、しばらくは、沖縄のキャンプ場で一日五百円とか払って泊まって、なんなら海に潜って魚を捕って、たき火で焼いて食べるとかで、一冬くらい暮らしても…
大丈夫！)

章子はそんなふうに考えて、にまにましながら… 眠った。

十二. そして。

十二. そして。

しかし、ある日…。

いつもどおり、時間よりちょっと早めにお店の前まで行くと、開店準備中のはずの小母さんが手を止めて、ものすごく困り果てたような声で、誰かに、言い訳？ をしていた。

「…ええと、だって、…本人が十五歳は過ぎてる。って、言ってたもんで…」

「ええもちろん、履歴書はもらってますよ。親御さんの承諾書も！」

こっちから言う前に、自分から、ちゃんと持って来て…」

「いえ、確認はしません。忙しくて… 毎日ちゃんと時間前に来て、とっても良く働いてくれてたし！」

（…もしかして、あたしのこと…？）

ぎくっとして、章子は立ち止った。

「しかしですね…」

小母さんの向うに居た人が喋りだすのが、見えた。

制服を着た…ごつい…

お巡りさんだ…ッ！

「…おっ」

その制服警官が、立ちすくんでいる章子に気づいた。

小母さんが、気配で振り返った。

「…あっちゃん！」

小母さんが、呼んだ。

「この人が、あっちゃんのこと、探してるって…！」

「…家出人の首藤章子（すどう・あきこ）だな？ 捜索願いが出ている！」

…ひっ！

…と、声も出せずに、叫んで…

章子は、逃げ出した。

逃げ出そうと…

もがいた。
脚が、もつれて…
倒れそうに、なって…！

警官が、どどっという勢いで、奔って追いかけてきて…
「こいつ！ 逃げるかあ…ッ！」
章子の腕を、がしっと掴んだ。
「…痛…ッ」
苦痛と罵声が、章子を…また。
どん底に、突き落とした。

眼の前が、真っ暗になった。
呼吸が、できなくなった…。
(ああ、…やっぱり死ぬんだ。死ぬしか幸せになれないんだ、あたし…)
章子は、もがいて、もがいて、
苦しんで…
倒れた。

*

…目が覚めると、そこは、白い布に覆われた…
病院？ のベッドの上だった…。

「あ、気がついた？ 良かったわ…！」
誰かが、小さく叫んだ。
あっと思った。
制服の…
婦人警官？ だった…！
章子は、絶望した。
(…やっぱり、連れ戻されるんだ。あたし…！)
涙でなにも見えなくなった。
「アキコさん？ 首藤章子さんよね？ あなた過呼吸で倒れたんですって…
判る？ みんな、心配してたんですよ！」

「…帰りません！」
章子は、叫んだ。
叫ぶ声と力があるのが、自分で驚きだった。
「あたし絶対に、帰りません！ …死んでやる！ そのくらいなら、死んでやる…ッ！」

…息が切れた。

それだけで、…まだ横になっているのに、…目が、回った…。

「…安心して。」

誰かもう一人、婦警さんの隣に座っていた、きっと補導員か何か役所の人らしい、てっきり『敵』の一人だと、思っていた人が…

黒い地味なスーツの女の人が、穏やかに、言った。

「章子さん、安心していいのよ。あなたはあの家に帰る必要はありません…。

あなたが、帰りたくないなら。」

「…………え…………？」

「みんな心配して探していたと言うのは、あなたがもう自殺してしまったんじゃないかと思って。あなたがあの制服やカバンを捨てて行った山の中とかを、警察の人がみんな徹夜で何日も捜索してたんですよ、という意味なのよ。

…誤解させちゃったみたいで…、ごめんなさいね？」

「…………え…………？」

「あなたがあの日、いなくなった後、病院から警察に通報があって、捜査が入りました。

あなたが家族やクラスメイトから毎日どんな目に遭わされていたのか、複数の証言があって、お父様もお母様もクラスの人たちも、みんな取り調べを受けました。

お父様は事情聴取中にすごく暴れて、警官と児相の担当者に怪我を負わせたため…

現在拘留中で、裁判があるまで、外にも出て来られません。

あなたを捕まえに来たりできない状況にありますから、どうか、安心して、私達の話を聞いて？」

…しばらく、意味が判らなかった。ただ…

「帰らなくて、いい…？」

「そうよ。安心して！」

「なんだ…？？？？」

「申し遅れましたが、私は、ジドウフクシの谷口と申します。

…児童相談所。って、分かるかしら…？

とにかく。

私たちは、あなたの味方です！」

「…帰らなくて、いいんだ…？？」

「そうよ！ 安心して！？」

全身のちからが、抜けた。

がくがくと、震えが走った。

章子は、はじめて…

人前で、声を出して。

全身で、

哭いた…。

(終)

(第1稿) 『 その話の、続きを。』

（第 1 稿）

（2019 年 3 月 1 日～）

『 その話の、続きを。 』

『 その話の、続きを。 』

(梗概) (第1稿) (2019年3月1日)

『その話の、続きを。』(梗概) (2019年3月1日)

霧樹里守 (きりぎ・りす)

首藤章子 (すどう・あきこ)、14歳。中学生。

学校での綽名は、「穴あきアキコ」。

居場所が、どこにもない。

ある日、「もう、どうしても、絶対に！…家には戻りたくない！」と。

深夜のバスターミナルから歩き出す。

死んでも戻らない。

死ぬなら、海にしよう。

海へ。海へ。

…だって、海なし県の生まれだし…！

痛むお腹と痛む脚。痛む心をひきずって…

歩いて、歩いて。

海へ。

綺麗すぎて、死ねない。汚せない…！

歩いて、歩いて。

生きて。

生きのびて…。

捕まって。

家に、戻されて…

大人になって、再生を図る。

そんな、物語。

1. 1日目。(バスターミナル。深夜発)

1. 1日目。(バスターミナル。深夜発)

もう。絶対に。

どうしても、家には二度と、帰りたくない。

…と、章子（あきこ）はおもった。

場所はバスターミナルで、いつもここを通るたびに、いつもいつも、それは考えてきたことではあった。

でも今日は、今日こそは…

本当に、二度と、戻りたいとは思えなかった。

死んでも。

章子はぼんやりとまとまらない考えとしつこくて鈍い頭痛をもてあましながら、いつもの塾帰りの（はずの）夜更けの、この地方の中核都市のひとつの一一番大きな駅ビルの地下から、覚えきれないほど多方面への近距離と遠距離のバスが常時頻繁に出入りする、巨大な地下迷路のような、バスターミナルの…

一番かたすみの、地下の食料品売り場からの重たい荷物を大量に提げた兼業主婦層の人たちだけが知っているような狭い抜け道の通路の脇の、寒い、いつものベンチで、いかにも、次のバスまでの長い待ち時間を、持て余しているような風を裝って…

壁によりかかって、うつらうつらと寝ていた。

本当はもう何本も、家へと向かう本数の多い直通路線のバスを見送っている。

脚のあいだからはまだだらだらとたくさんの血が流れている感触があって、とても気色が悪かった。

なまあたたかいのに、冷たくて、ぬるくて、痛い。

針でつつかれるような…

鈍痛。

悔しい。

辛い…

いっそのこと、このまま出血多量で、死んじゃえれば、…一番いいのに。

なかば本気でそう思って、ずっと座っていたのだったが…

あいにくと、ただひたすらに気分が悪いだけで、貧血で気絶することすらなかった。

「…あなた、大丈夫？」

時折り、通りすがりの、自分も大変そうなどても疲れた顔色だったり、大荷物を抱えていたりする、それでも困っている他人をみかけたら、つい助けようと思ってしまわずにいられない、風な見知らぬ小母さんたちが、声をかけてくれた…。

「あ、大丈夫です。…バスまで、まだ30分くらいあるんで…」

章子は礼儀正しく答えた。

鬼母の声がいつも脳内に聴こえる。

『きちんとしなさい！ きちんと！ きちんと！ きちんと！

なんでアナタは出来ないの！ きちんと！ 普通に！ よその子たち、みたいに…！』

あの鬼母なんかじゃなくて、このまともで親切そうな小母さんたちの誰かが、あたしの「本当のお母さん」だったらいいのになあ…。

もっと小さい頃に、本気で考えていた空想をふいと思い出す。

親切そうな小母さんたちは心配そうに、何度も何度も、章子のほうを振り返りながら…

自分たちが乗るバスが来ると、仕方なく乗りこんで、去って行く。

(…いいなあ。帰る家があつて…)

章子はぼんやりと考えた。

そして同時に、

(もう、帰りたくない…！)

絶対に。と、思った。

そう思いながらも体も心も重すぎて、麻痺してしまって、身動きすらもできぬままに、うつらうつら…していた章子の眼に、赤い色が映った。

その方面へ行く今日の「最終バス」を意味する…

通称「赤バス」の時間帯に入った。

あたりの雰囲気が、あまり馴染みのない「深夜」という雰囲気に…

なっている。

ぞくりと。寒さを感じた。

ぶたカバンから、ぐしゃぐしゃのジャージをひっぱり出して上着だけ着た。

制服が、じっとり湿っている。

章子の、不快な感じの冷や汗と…

それだけじゃなく、梅雨のあいまの、霧雨のような…

湿気が、じとりと、肌に冷たく感じた。

霞む白銀の天井灯が照らす地下ダンジョンの構内に、人影はもうずいぶん少なくなっている。

さっきから何度も、章子のまわりを行ったり来たりしている…のは、構内を掃除しがて

ら監視してまわっている…

警備員の制服だ。

(厄介ごとを起こすなよ?)

その眼が冷たく睨みつけていた。章子を。

(さっさと帰れ。不良の家出娘が…!)

その、陰惨な…顔つきが。

鬼父を、思い出させた…。

ぞくりとした。

思わず、立った。

ちょうど、すぐ目の前を、ちょっと迂回しながらのルートで章子の家に向かう方面の、完全に、今日の最終のバスが、赤い紅い行先表示を魅せびらかしながら…

走って行って、停まった。

停車時間は数分間ある。

のろのろと、歩いていけば…

まだ、乗れる。

章子は考えた。

…いつものように。

あれに乗って…

降りて。

歩いて…

ドアを開ければ。

とりあえず。

食べるものはあって、

眠る場所もある。

着替えるものもあるし、

明日の…

学校の…

課題だの教科書だの、

嫌なことも…

ぜんぶ、有る。

章子は通り過ぎた。

バスの前を。

だらだらと人の群れが乗りこんでいって、

バスは定刻に発車した。

ぐるりと回って、章子の家の方面へと向かう。

その、反対側へ。

章子は、歩きはじめた…。

2. 2日目。(公園。夕刻発)

2. 2日目。(公園。夕刻発)

目が覚めたら、どこかの空の下だった。
一瞬、自分が誰で、どこで、何をしているのか…?
分からなかった。

もうすでに傾き始めている時刻らしいオレンジ色の太陽が正面からぽかぽかしていて、濡れた服がすっかり乾いていて、からだじゅうの、特に体の奥の芯から麻痺してくるようだった、ずっと続いていた冷えや痛みや気持ちの悪さもずいぶん軽くなっていて、よく本の中とかで「生まれ変わったような気持ち」と表現しているのは、こういうことだったかと、ちょっとだけ驚いた。

見晴らしのいい場所だった。関東平野が一望できる感じの、どこかの小高い丘の上の、公園の、…振り向いて見回してみたら一番隅っこ、崖がわの外れにあるベンチだった。
(ああ…)
と、昨夜のことをぼんやりと思い出した。

*

あのまま、歩き始めて…
歩いて、
歩いて…
途中のコンビニで、おなかがすいて寒くて、ちょっとだけ歩きながらでも食べられるものと、ビニールの安いレインコートを買った。
それからまた、ぼんやりと、歩いて、歩いて…
どこへ向かっている道なのかはさっぱり分からなかったが、とにかく、あの嫌な嫌な地獄の家へと続く道とは、正反対の方向だ。
ということだけは、確かだった。
いつも、背中から責めるように追いかけてきていた月が、今は、真正面にある…。
ぼんやりと霞む月を眺めていたのはほんのちょっとの間で、時刻が深夜をまわると、冷たい霧雨が降ってきた。

買ったレインコートを羽織ってはいたけど、裾が短かった。失敗だった。
スカートから下が、かなりじっとりと濡れた。
靴と靴下がびちゃびちゃしてきて気持ちが悪かった。
でも、ずっと歩いた。
何も考えられなかった。からだは辛かった。
でも、歩いた....。
そして。
夏至の前の梅雨の晴れ間の、東の空が、白みはじめて。
その時、ただずっと何も考えずにまっすぐ歩いてきた道は、曲がりくねりながら、小高い丘を...くねくねと、登っていた。
住宅街は途絶えて、街路灯も途絶えて、あたりは真っ暗で何も見えない雑木林と、何かの工場か倉庫のような無人らしい建物が、まばらに点在するばかりになっていた。
小高い丘の頂上が、かなり広いめの公園になっていた。
...夜明け前で、人影はない。
ほんやりと大きな駐車場のなかへ歩いて入ると、水飲み場があったので、口をつけて、ごくごくと喉を鳴らした。
ちょっとだけ、生き返ったゾンビに、なったような気がした。
(...ああそうか。コンビニで、何か、飲むものも買えばよかった...)
そんなことを考えていたら、きらきらと明るく光り輝く、自販機が目に入った。
ちょっとおかしくなった。
そういえば、道沿いにも、いくらでも、自販機も、他のコンビニもあったのに...
...自分は。
喉が渴いている。ということにすら、気がつけないような。
そういう、状態だったのだ...。
(ほんとに... ゾンビみたい?)
ゴトンと音を鳴らして、一番大きなスリドリのペットボトルを選んで、ごくごくと一気に半分くらい飲んで...
目の前の、ちょっと離れた場所にあったベンチにまわりこんで、ストンと、座った。
東の空から。
...朝日が... !
...きらきらと、金色の、陽射しが... !
...自分の、汚れきったからだを...、
照らした！
(...すごい... ! 綺麗... ? に、なった... ? ?)
と、思ったことまでは...
覚えている。
そのまま、意識が途切れた...。

*

(で、…寝てたのか。今まで…)

時計を見ると、夕方の四時だ。

昨日のあれから、二十四時間…くらい、経ってる。

…ずいぶん。

世界が、変わったなど。

丘の上から、一望できる関東平野の…

はるかかなた…

あれは、富士山？

あっちは、つくば山…？

…を、眺めまわした。

(…もしかして、あたし実は、もう死んでて。

ここは… 天国…？)

そんなはずはない。と思いながら。

章子は、そんな感じがしていた。

とにかく。

もう、帰らない。

のだ…。

それだけで。

あの地獄の日々では、なかった。

*

(どんなになってるのかな？)

ちょっとだけ、後にしてきた地獄の、「いつもの日常」のあの日々が。

ちょっとだけ、壊れた？ あの世界のありようを…

想像した。

大騒ぎになって、徹夜で探されてるだろうか？

まったく無関心で、冷淡に。

いてもいなくてもどうでもいいやと。

見捨てられてる。だろうか…？

…どっちもあるような気もしたし、どっちでもないような、気もした。

とにかく、

どうでもよかった。

もう、帰らないのだ。

二度と…！

それでも。

(たぶん、警察とかに見つかるのは… まずいよね？)

中学二年にもなれば、そのぐらいの智恵はつく。

陽射しを浴びて、暑くなっていたので、湿気がこもって水滴にすらなっているコンビニ

のレインコートはぱりぱりと脱ぎ捨てた。

服…

かなり目立つ、県下ではそこそこ有名な、私立中学校の…

制服。

どろどろの、砂だらけの、汚い足型のついた、汚れた白い体液の滲みまで着いた…

制服。

あたりを見回した。トイレがあった。

今日はまだ平日なせいか、さいわい人影はない。

わりと綺麗に清掃されていることがありがたかった公園の水洗トイレの個室に籠って着ていたものはぜんぶ脱いだ。

昨日の夕方からずっとバスターミナルで座ったままで一度もトイレにも行かず、そのまま歩き始めてしまってただひたすら歩き続けたままでやっぱり一度もトイレに行かずナップキンを取り换えもせず。

そしてさらに昼間ずっとこんこんと爆睡していた間に、股間とスカートのお尻の部分が、大悲惨！ な事態になっていたけど…

ありがたいことに出血そのものは、もう停まってくれていたようだった。

脱ぎ捨てた汚れた下着の代わりに、体操着のブルマでいいやと、直接履いた。

上下もジャージに着替えた。

トイレも済ませて、個室から出て、手を洗って顔も洗って、髪をとかして…

歯ブラシも持っていたんだったと、思い出してポーチを探って。

歯も磨いたら、本当に、生まれ変わって別人になったような、気がした…。

ベンチに戻って、しばらく考えた。

今日はとにかく、こんなところで一日眠り込んでいたのに、一度も大人に見つからなかった？

のは、たぶん、ものすごく、運が良かった…。

でも。もし五月蠅いのに見つかって、学校に通報とか、警察に補導とか、されたら…

連れ戻され、る。

それは、絶対に、ダメだ。

嫌だ…！

重たい通学カバンをひっくり返して、一番必要なものだけ取り出した。

ジャージを入れていた袋はナップザックにもなるやつだ。

そっちに要るものだけを、詰め替える。

ぶたカバンと汚れた制服は…「ごめんなさい。」と係の人？ にこっそり謝りながら、公園の隅にあった小型の野外焼却炉の口の中にぎゅうぎゅう詰め込んだ。

きちんと顔を洗って髪も梳かしてきちんと後ろで一本縛りにして。

体育ジャージにナップザックに、ちょうどよく？ 歩きこんで、けっこう汚れた靴に。

これでさくさく歩いていけば、部活の帰りにしか見えない？

…たぶん。

家出だと、ばれないように。

章子は、新しい人生の、一步を…
踏み出した。

3. 3日目。(よそハマ。海浜公園)

3. 3日目。(よそハマ。海浜公園)

とりあえず、とにかく南に向かった。

絶対に戻りたくない地獄の家と学校からは反対方向だったし、辿ってきた道の行く先がぐねぐねと下りながらそちらへ続いていたし、目の前は関東平野で、広くて広くて、建物がいっぱいいて、中学生が一人くらい、こっそり紛れ込んでも、どこかで生き延びられるような気が、した。

(でも、もし。)

と、章子は考えた。

捕まって、連れ戻されるくらいなら…

死のう。

そのほうが、絶対にマシだ。と…

(どうせ死ぬなら、海が見たいな。)

ふいと思った。

(もうずっと長いこと連れてってもらえなかったし。子どもの頃に見たきりだし…

海なし県の、生まれだし！)

…海を観てからなら、死ぬのも悪くなさそうだ…

そう考えたら、気分が明るくなった。

海を観て、どこかで死ぬまで。

生き延びよう。

…なんとか…。

そんなことをつらつらと考えながら、どんどん歩いた。

いかにも、地元の中学生の、部活の帰りのような顔をして、まるで、見知らぬ住宅地や商店街を…

いくつも、通り過ぎた。

*

どこかの、駅に出た。

知らない、私鉄の駅だ。

かろうじて地名と線名だけは、社会の教科書で知ってる。

そんな町…。

にも、見慣れたチェーン店のバーガー屋はあった。

座って、夕飯？ を食べた。

おなかが、ぐうと鳴って、野菜たっぷりのスープが胃壁に染み渡るよう、美味しく思えた…。

(ご飯が、美味しいなんて。)

思えたのは、いったい、何年ぶりだろう…？？

それからそーっと、まわりの席の人たちからは看られていないことを確認しながら、財布の中身を数えた。

よりによって、昨日。

あの、たぶん、人生最悪の一番目か二番目の…、その日に。

財布の中に、塾の夏期講習の申し込みをするはずだった、一万円札が、何枚も…束で。

入っていたのは、きっと、…神様とか何かそういう見えない力。

からの…

『逃げなさい！』という、応援メッセージのように…

思えた。

『逃げなさい！ 逃げて、いいのよ！』

アニメの科白を思い出す。

それ、ずっと、わたし、言って欲しかった…。

涙が落ちた。

哭くことすら、久しぶりだった…と。

気がついて、声を殺して…

泣いた。

*

とりあえず、うんと節約して使えば、しばらくは、生き延びられそうだった…。

…死ぬまで、は…。

(たとえば、一日千円ずつ使うとしたら… 秋くらいまでは、生きられる…？)

でも、ちょっと。と、自分の姿を見下ろした。

今日は金曜の夕方で、幸いなことに校名は入っていない体育ジャージで夕方遅くに一人でバーガー屋にいても、そんなに目立たないけど…

明日から土日で、昼間にこの恰好で町中や街道沿いをふらふらしていたら…

かなり、目だってしまうのではないかと思う。

それにそもそも汗臭い。昨日体育で、さんざんな目に遭わされて… ちょっと吐いた、臭いすら、…するような…？？

章子は急に不安になった。髪だって、水浴びしただけで、ちゃんとは洗っていない…！

とりあえず、バーガーのトレーを「きちんと」片づけると…

眼についた、駅前の、一番安そうな量販店に、向かった。

一番安い服と一番安いリュック。

でも、自分で選んだ。初めての、買い物だった…

嬉しかった。

駅のトイレで、いそいそと着替えた。

そのまま、電車に乗った。

だって、いくらなんでも。

ここまで歩く途中に見た、広い広い関東平野を。

海まで、歩くなんて…

無謀に過ぎる遠さだと、思えたからだった。

*

(あたし一人で、都心に来るなんて…！)

と、思いながら、幾つかの大きな駅で、苦労して路線を調べながら…

乗り換えた。

(でも、)

と、ちょっと思った。

家出した、あたしからの女のコが、ひとりで生き抜くためなら…

このへんに潜んだほうが、いいのかも？

テレビの話や雑誌の片隅には、よくある。

『からだを売って』家出して、生き延びる…方法だ。

(でも、)

それでは、今までの地獄と、あんまり、変わらない…

と、思った。

章子は、覚悟を決めた。

地獄の家には、戻らない。

からだも、売らない。

それで生き延びられないかったら、おなかが空いたら…

死のう。海で…

海へと向かう、一番まっすぐな、電車に飛び乗った。

*

慣れない…というか、人生初の…都心の帰宅ラッシュの満員電車に押しつぶされた。

(…働く。って…！ こんなに、大変なのか…！)

潰されたり、踏まれたり。怒鳴られたり、嫌味を言われたり。

知らない汚い親父に胸をいきなり掴まれたり。

後ろからお尻を揉まれて、気持ちが悪かったり…

(…これじゃ、あの地獄と変わらない…！)

気分が真っ暗になった章子は、途中駅でふらふらと下車した。

しばらくホームのベンチで、へたりこんでいた…。

(ここ、どこ…？？)

路線図を観ると、いくつか乗り換えれば、別のルートからも、広い海へ、出られるようだった…

電車がすきはじめる時間帯まで、ホームのベンチでぐったりして待って…

ゆっくり座って移動できそうな、空いている各駅停車に、乗った。

*

電車の中は、空いていて、離れ離れに座っている女性客たちは、グループごとに遠慮なく大声でお喋りをしていた。

色々と、いい、情報源になった。

いくつか各駅停車の乗り換え駅をそのまま乗り継いで、海に、着いた…！

ころには、深夜に、なっていた。

真っ暗かと思っていた、海辺は…

意外に明るい。

そして、カップルとか友達グループとか、家族連れとかのバーベキュー？ とかで、意外に、賑わっていた…。

(これは、死ぬ場所じゃ、ないなあ…)

章子は苦笑して、しばらくの間、海岸の国道のガードレールによりかかって、黒い波のうねりと、白い波しぶきのぼしゃりばしゃりとした音と動きを、観るともなしに、しばらく観ていた。

夜の海は、初めてだった…

なんだか、癒されたような、暖かい自由な気分になった。

(死ぬのは、昼間の、青い海を観てからでも、いいよね…)

回れ右をして、また、歩き始めた。

電車の中で聴いた…

二十四時間営業で、中でごろごろっと眠れるスペースのある、スーパー銭湯とやらを、探して…。

*

二時間ほど歩くと、大きな道路沿いに、それはあった。

夜中に子どもが一人で入れる場所かどうかが心配だったが、明日は土曜日とあってか、駐車場には満杯の車が停まり、徒步や自転車で来る地元の人達も、ひっきりなしに出入りしていた。

中学生だけの、グループで来ているらしい女子たちも、結構、いる…！

いつも学校でやってきたように、ぼっちじゃなくて、そこのグループの一員なんです。

ちょっとポーチの中を診ていて、遅れているだけなんです…！ という風を装いながら、前を歩く女子たちの後ろに紛れて切符を買って、こっそり紛れ込んだ。

ちょうど、「こういうとこ、初めて来たんだけど…！」と、窓口の人たちに利用方法を質問している初老の夫婦がいたので、自販機のシャンプーを眺めるふりをしながら、係の人の説明を、しっかり聞いた。

…朝まで泊まるとすると、別料金が追加になるのかー！

…とは思ったが、財布の中身を考えれば、まだまだそのくらいは払える。

ロッカー室で服を脱いで、小さなリュックはしっかりしまって、超！ ありがたいことに！ コインランドリーまであった…！ と大喜びで、汗臭いどろどろのジャージと体操着を、まとめて洗った。

ゆっくり～～～～～り！

お風呂に浸かった。

子どもの頃、どこかで銭湯に入れてもらった記憶はぼんやりあるけど。

こんなに大きなお風呂に入るのは、修学旅行の旅館くらいしか経験がなかった…。

すごく大勢の人がいた。

のどかで穏やかで、湯気と熱気とざわめきに満ちて…

本当に、知らない異世界。に、

来たような、気分になった…。

*

のぼせそうになったので、館内着とかいうちょっとデザインはださいパジャマのやうな
ものに着替えて、ご飯を食べるところに行った。

食券を買って、カウンターで渡して、待つと、番号で呼ばれる。

ぜいたく？ をして野菜がたくさん！ 乗っているラーメンを頼んだ。

死ぬほど！ 美味しい～ッ！！

…と、思った。

満腹して、ぼんやりしていた。

(…死ぬのは、当分先でも、いいかもしれない…)

なんだか、「嬉しい」という、気持ちを、初めて知った…。

*

まわりを観ると、ほんとに異世界だった。

仲のよさそうな友達グループ。

仲のよさそうな家族づれ。

仲のよさそうな恋人？ どうし…。

ほんとに、異世界だった…

(テレビとか漫画とかのアレは、現実にはナイ、アリエナイ、「理想の」家族とか。だと、思ってたのに…)

今、目の前でくつろいで、テーブルの周りではしゃぎまわっている子どもたちを、一応叱ってはいるが殴ったり折檻したりはしない、呑気そうな親とか。

いわゆる「友達親子」とかいうのだろうか、おばあちゃんと母親と孫娘？ が、いっしょにだらしないパジャマ姿で、だらしなく座って、だらしなく食べ散らかしながら、きやあきやあはしゃいで、おしゃべりに興じているテーブルとか…

章子には、異世界だ。

（…気持ちが悪い…！）と、思った。

こんなの、こんな明るくて、夢みたいな、天国みたいな世界…

（現実じゃ、ない。）

…章子に、とっては…。

…と、思っていたら…！

「ねーちゃん、ねーちゃん、ひとりか？」

「こっち来て、一緒に騒ごうや！」

……ぞーーーーーっとして、固まった。

…知らない、酔っ払いの、お風呂あがりなのに、それでもなんだか小汚い感じのおっさん達に…

取り囲まれて、いた。

「ビール酌してくれよ～！」

「添い寝してくれてもいいぞ～！」

「…あ、…………あの…ッ！！！」

章子は、固まった。

こういう場合、言っても…いいはずだ…「嫌だ！」と…

でも。

今まで。

「嫌だ」とか言ったが最後…

もっともっと、酷い目に、遭わされて、来た…！！

「おい、やめろやオッサン！」

さっき、章子が、（気持ちが悪いッ！）と思った「夢の中の」理想の、「普通の」世界の…

家族みんなが「本当に」仲が良さそうで、祖父母と夫婦と兄弟姉妹数人で大きなテーブルを囲んでいる、その中の、高校生くらいの…男の子が。

章子を取り囲んでいる、酔っぱらった、おっさん達をめがけて…

荒々しい声で、怒鳴った。

「そのコ、嫌がってんだろーが！」

「…やだ、ちょっと、おじさん達～？」

男の子の母親らしい、ちょっと酔っぱらっている女の人が、それでもすくっと立ち上がると、章子のほうへすたすたと歩いてきた。

「こういう所で子どもナンパしないの！ そういうことがしたかったら、そういう店に行きなさい！…さっさとあっち行かないと、店員さんを呼ぶわよ！？」

見ず知らずの、女人が…

何の得にも、ならないのに…

自分が巻き添えの被害に遭うかも、しれないのに…

問答無用で何ひとつためらわずに、章子の前に、立ちふさがって…

(…守って、くれた…！)

章子は、びっくりしていた。

おっさんたちは、「…なんだよ～う！」とか言いながら、飛んで来た係の人にも脅されて、早々に、自分たちの席へと、おとなしく戻って行った。

「…あんた、大丈夫…？」

びっくりして、涙ぐんで、固まっている…

章子の表情を誤解して、知らない高校生のお兄さんのお母さんのお母さんは…

優しく、教えてくれた。

「ひとりで来てるの？ じゃ、ここじゃなくて、あっちの席に座るといいわよ。女性専用だから。変なのが入り込もうとしたら、お店の人が、停めてくれるから。」

「…………、あ、ありがとうございます…ッ！」

生まれて初めて、人から、かばってもらった…！

章子の涙声のお礼は、なんだか場違いに、大きく響いたようだった…

*

「女性専用」と、たしかに札が出ていた。

子どもは？ 入っていいの…？

と心配しながら、おそるおそる、中をのぞくと…

一人で来ているらしい女人が、あちこちで、ゆっくりごろごろしていた。

数人で来ている人たちも、小声で、きゃっきゃと嬉しそうに盛り上がって、平和に内緒話をしている…。

(…ここも…！ 知らない世界…！)

驚きながら、ふわふわと、背中からちからが抜けていくのがわかった…

もう今日はこれで限界だった。

すみっこの毛布は、無料で借りられるらしかった。

かなり混みあっていたが、章子は、すみっこのすみっこの壁のほうに、ちょうどぴったりはまりこめる小さな隙間を見つけた。

テーブルの角に隠れて、横になった瞬間…。

爆睡。していた…。

4. 4日目。(海岸。砂浜)

4. 4日目。(海岸。砂浜)

がつっ！…と、額の中央を殴られた。

軽い衝撃だったけど、きっと、またすぐに、二発目が来る！

章子は、もう慣れ過ぎてしまって逆らいようがない恐怖と絶望と無力感の暗闇地獄に引き戻されて。「ひッ！」…と小さく叫んで、両腕で額をかばいながら、エビのように身を硬く丸めた。

「…あらやだ！ お嬢ちゃん！」

降ってきたのは、鬼父の拳固やなにか鬼母がよく武器の代わりに使う麺棒や雨傘ではなくて、

知らない…、女のひとの、声だった。

「どしたの、佐藤さん？」

「脚、ぶつけちゃった！」

「あ～！ …そこね。そこに寝てると、見えないのよねえ～！」

「お嬢ちゃんっ、だいじょうぶっ？」

「こらこら、お客様でしょ？」

「あっそうでした～。お客様！ お客様！ …起きて～！」

章子は、はっとして目を覚ました。

(…何？ どこ？…何ッ？？)

がばっと起き上がる…

ついさっき、自分のひたいを「殴った」らしい、…テーブルの脚部の底が…見えた。

「…ごめんなさいお客様～！」

(…思い出した…。昨日、お風呂の、「女性専用」の…、畳の部屋で、寝たんだ…？)

ぶつかったのはその時、楯のように身を隠してくれた、低くて大きい…

八人がけの座卓？ テーブルで…

それを横向きの片方に持ち上げて、立てかけて、女のひとは掃除機を、かけようとしていた、らしかった…

「あ～本ッ当に、すいません！ おでこ、ちょっと血が出てるわ！」

「…えと… あ、だいじょうぶです…」

「こすっっちゃダメよ！ ごめんなさいねえ～っ！」

女のひとは慌てながら腰のポーチから可愛い猫もようの絆創膏を出して、おでこにぺたんと貼ってくれた。

「...え...」

たったこれくらいの、怪我の、...手当を。

人に、『してもらった』のなんて...

初めて？ だった...。

「あ、...ありがとう...ッ！」

真っ赤になって、お礼を言った。

女のひとは、困ったように、慌てて手を振った。

「いえいえ、ぶつけちゃったの、アタシだしつ！」

「このひとソコツなんですよ～、赦してやってくださいね～」

まだけっこう若そうな女のひとの後ろから、年嵩の、おばちゃんとおばあちゃんの中間くらいの年輩のもうひとりの人が、声をかけてきた。

二人とも、おそろいの、制服だ。

「ところでお客様、よく寝てたみたいだけど～。この部屋は朝七時から十時までは一旦閉鎖して掃除をしてるんですよ～」

「...え。...あ、...」

気がつくと、昨夜あれだけみっちりごろごろとしていた沢山の女人たちの姿はない。

「お風呂は露天風呂だけ掃除中だけど、他はもう入れますからね～。お帰り前に、ゆっくり身支度なさって下さい～。」

慣れた風に滑らかに案内しながら、言外に「どいてくれないと掃除できません～」と、失礼にならない程度に追い出しにかかっている...

雰囲気からすると、こういうことをやらかしてしまう客はよくいる感じで、ちょっと迷惑かもだけど、そんなに怒られているわけでは、ないらしい。

「す... すいません...」

章子は紅くなりながら、抱えていた小荷物の袋と、ロッカーの鍵もちゃんと持っていたことを確認して、慌てて休憩所から出た。

*

言われた通りに浴室へ向かうと、他の女人たちも結構たくさん、時計は気にしながらも、の～んびりした雰囲気で、ばしゃばしゃとかシャワシャワとか、身支度の朝風呂をしている。

(...こんな時間にお風呂に入ったの初めて...)

もうすでにかなり高く昇っている朝陽が露天風呂との間を仕切る大きな窓ガラスから金色にきらきら斜めに射しこんでいて、湯気が白くふわふわと踊りまわっていて、天国？のようだった。

言われた通り、朝風呂は立ち入り禁止の黄色い立て札が置かれて、数人がかりでせっせと掃除をしている。

(...楽しそうだな...)

立ち働いている人たちが、お互いに声をかけあってきぱきと作業を進めている様子が…

なんだか、うらやましい。

館内放送は、このお風呂は二十四時間営業ではあるが、午前十時に一旦閉めて精算？ するので、昨夜からずっと居続けている人は、午前十時までに玄関前のフロントまで来て、お金を払って下さい… みたいなことを繰り返し賑やかに案内している。

時計を見ながら、のぼせない程度にゆっくりお風呂に使って、髪も洗って、さっぱりして、ドライヤーを使って、それから思い出して慌ててコインランドリーまで服をとりに戻った。

洗濯槽のほうに入れっぱなしで忘れていた服は、誰かが（たぶん係の人が）ちゃんと乾燥機にかけ直してくれていて、空いた籠に「置き忘れご注意下さい」という札を載せられて、きちんと畳んで置いてくれてあった。

(…うわ～、ここでも、迷惑？ カケちゃった…？？)

章子は身がすぐむ思いがしたが、きっとこの天国のような優しくて明るい場所では、そのぐらいのことでは、誰も章子を殴ったり罵ったり…しない。

昨夜ラーメンを食べた食堂はこの時間はまだ開いていなくて、軽食スタンドで食べて下さいと案内された。

…高かった…。

一番安いトーストセットだけ頼んで、歯を磨いて、トイレを借りて、身支度を済ませて… 他の人達の列にまぎれるようにして、フロントの会計の順番に並んだ。

家族連れや恋人同士？ や友達集団のほかに、ひとりで来ているらしい女の人も男の人も、他にもたくさん居た。さすがに中学生で一人で泊まったのは章子くらいじゃないかとは思ったが、高校生や大学生くらいで女子ひとりのお客さんは他にも何人かいて、お店の人も、ちらっとちょっと困ったような顔はしたけれども、特には何も言わないで、普通に清算してくれた。

…………高かった…………！

(…地獄のサタンも金次第、ってよく言うらしいけど… 天国も、お金、かかるんだ…？)

昨日の夕方、あの高台の公園で、「一日千円ずつとかで節約して使えば、秋までぐらいは生き延びられる？」と、余裕で、計算したはずなのに…

昨日一日で、服とリュックを買って、電車代を払ったせいもあるけど…

お風呂に入ってご飯を食べて、一晩ゆっくり「泊めて」もらったら…

一円札が、一枚、もう無くなってしまった…！

(…じゃ、…これじゃ、あと一週間とかしか、…生き延びられない…！

ってこと…？？)

朝風呂で湯あたりしたせいもあるのか、ちょっと貧血を起こした感じで、目の前が真っ暗になって、

…「地獄に、引き戻される！」絶望感がして…

お風呂の前の一休みベンチで、しばらく座ってぼんやりしていた。

「…お客様～ん！ 乗らないの～？」

運転手さんから、声をかけられた。

どうやらそこは、「無料送迎バス」のバス停のベンチらしかった。

「…あ…っ 乘ります～！」

章子は何も考えていなかったので、とりあえずバスに乗った。

最寄りの私鉄の駅の前まで、十五分ほど走って、降ろされた。

*

そこからまた、海に向かって歩いた。

日曜日で、晴天だった。

太陽はもうかなり高くなっていて、ほぼ真正面から、きらきらと照りつけてきていた。

しばらく考えて、悩んで、迷ってから…、

道沿いのスーパーで安売りしていた夏帽子と、一番割安になると計算して、水の大きなボトルを買った。

ごくごくと仁王立ちで巨大ペットボトルのお水を飲んで、帽子をきっちりかぶってまた歩き始めると、気分はかなり明るくなってきた。

海へと続く国道沿いには、車もたくさん走っていたけれども、気持ちのいい海風が排ガスを吹き飛ばしてくれているので、暑くもなく乾燥していて、汗をかいてもすぐ乾く。

水は大きなボトルで買って、正解だったと思った。

かなり重たかったけど、海につくまでには無くなりそうだったし、道沿いを軽快にジョギングやウォーキングしたりしている人たちも、みんな大きなボトルでごくごく気持ち良さそうに飲んでる。

「立ったままラッパ飲みなんて、お行儀悪い！」

とか、誰も、章子を叱り飛ばして「罰として夕飯抜き！」なんて、言ったりしない…。

…なんだか、やっぱり、愉しくなってきた…。

章子は、ゆっくり、まっすぐ、海へと…

歩いた。

*

海に着いた。

海岸は、ほどほどに混みあっていた。

まだ泳ぐには早かったけれども、遠くにはサーファーやウィンドサーフィンの人たちがこれでもか！ という勢いでひしめきあっていたし、波打ち際は水遊びに興じる人たちでいっぱいだ。

割り込んでいく気にもなれなかったので、章子は海浜と国道の境になっているコンクリの段々に腰を落ち着けて、ぼんやりと波の音を聴きながら、広い広い、太平洋を…

眺めた。

少し暑いくらいに暖かくて、空気はもやっとした海辺の水蒸気と気持ちの良い大洋風が交互に吹き渡っていて、陽射しは燦爛として真上で、国道を行き交う自動車の音の五月蠅さと、砂浜で遊びまわる家族連れや友達グループの楽しそうな大騒ぎが、潮騒の音す

ら打ち消す勢いで。

…誰も、喧嘩もしていないし、罵ったり、殴ったり、家族を強姦したりも…

しない。

…ここは、やっぱり、天国に近い場所？

だった…。

海辺の光景のいちぶに自分がはまりこんでいると、もう、ここで死のうとかいう気分は、どこかへ行ってしまった。

(…働く。って、出来ないかな…?)

鬼父や鬼母にあの地獄でずっと言われ続けてきたことは、とにかく勉強して、良い成績をとって、良い学校へ進学しなさい。ということだった。中卒とか高卒とかで、お掃除とか、そういう仕事に就く人たちは、「落ちこぼれ」で「人生の敗残者」だと… いうことだった。

でも。

さっきのお風呂の掃除の人たちは、みんな朝早くからきちんと制服を着て出勤してきて、仲良く楽しそうに、せっせと立ち働いていた。

あれなら、今の章子にだって、できるんじゃないかと思う。

(…せめて、高校生だ、って、嘘、つけないかな…?)

家出してきた宿無しの中学生では、どこも雇ってくれないだろう。ということだけは理解できた。

でも。

(お金は、使うだけだと、すぐに、なくなっちゃうだろうし…!)

働きたい。

切に、思った。

*

「…お嬢さん？ …お嬢さ～ん！」

気がついたら、また、そのまま横になって…

寝ていた。らしい…。

懐中電灯を持ったおじさんに起こされて、びくっとして、飛び起きた。

「よく寝てたね～。もう日が暮れたよ～。暗くなると危ないから、早めに帰んなさいね～？」

おじさんは、…無防備に寝ていた女子中学生に、何も「悪いコト」をしようとせずに…にこにこ笑って、声だけかけて、章子が起きたのを見届けると…

そのまま歩いて行ってしまった。

ゴミを拾ったり、まだ砂のお城と格闘している小学生たちに「早く帰んなさい！」と声をかけたり… しているだけの人。らしい…

(...海沿いって、やっぱり、天国に、近いの... ??)

今までずっと生まれて育った山間の盆地の地方都市の、章子のまわりに居た人たちとは、何もかもが違っているように... 思えた。

(海に近い... 天国って言うと... ニライ・カナイ... ??)

何かで読んだ知識が、ふっと脳裏に浮かんだ。

(... そうだ... ! 沖縄だ... !)

たしか不登校で高校を辞めて、その人は章子とは全然境遇が違って、理解のある親の許可と費用の応援はあったけど、子ども、一人で...

日本一周の旅に、出た人の、本だった...。

(沖縄って... ! 家出しても、夏なら、働けるんだ... !)

章子の知識はちょっと間違っていたかもしれない。

ただ、自転車で日本一周に出た、「高校を辞めた」子どもが一人で...

九州の南まで走って、そこから自転車と一緒に船に乗って...

南の島で、サトウキビを刈り取る仕事に就いて、旅費を自分で稼いだくだけは...

なんとなく、思い出せてきた。

(なんとか、歳を誤魔化して、高校を辞めた不登校児で、親の許可はあります！...って、ことにすれば... !)

沖縄なら、暖かいから、冬でもキャンプ場で安く暮らせる、そういう旅仲間が、沢山いたと...

読んだ、気がする...。

(.....歩こう！)

とりあえず、海岸沿いに...

九州まで。

何とかお金を工夫して、生き延びて、歩いて、

フェリーに乗って...

沖縄の、キャンプ場に泊まって。

歳を誤魔化して、サトウキビ畑で、働かせてもらおう... !

まだ残っていたペットボトルの水を、ごくごくと飲み干して。

夕焼けの最後の輝きが残る国道沿いを、西をめざして。

章子は、歩き始めた...。

5. 何日目？

5. 何日目？

…認識が、あまかった。

…ということは、歩き始めてしばらくして、すぐに気づいた。

夏至前の空梅雨の土曜の夜の湘南海岸は、日が落ちてからもずいぶん人が多かったけれども。

どう見ても未成年なのに酔っぱらっているらしい男の子たちの集団に、あっという間に取り囲まれて絡まれて、「いくつ？」「可愛いね」「せっくす！」「おっぱい触らせて！」「一発やらして！」…なんていう卑猥な言葉で四方八方からガンジガラメにされて、心が殺されかかった。

「…ひっ…！」

章子は叫んで、蹲った。恐怖と絶望のあの日の感覚を思い出してしまって、声も出せないほど青ざめて、がくがくと震えた。冷や汗が出てきた。

犬を連れた家族連れの散歩中の人たちが気がついてくれて、男の子たちを怒鳴りつけて、追い払ってくれた。

「だいじょうぶ？ ひとりで帰れる？」

小学生の子どもたちのお母さんらしい人が、心配して腕をとって立ち上がらせてくれた。ぱさぱさと、優しく、服についた砂を祓ってくれる…

「もう暗いからね～。女の子ひとりで海岸にいたら危ないわよ。上の道路沿いを歩いたほうがいいわ？」

(…やっぱり、あの地獄のドンゾコみたいだった場所よりは、天国に、近いよね…？？)

章子は立ち直れる気がした。震えは収まってきた。

お礼を言って、また歩き始めた。

「…あら、逆なのね？ 一緒の方向だったら、良かったんだけど…」

よその家の女の子のことなんか心配したって何の得にもならないのに。

非行なら警察に通報するとか、厄介ごとを起こされたら迷惑だとかじやなくて、本気で…

心配してくれる大人が、いる。

(じゃあ、もう少し… 生きのびて、みよう…。)

しかし。

土曜の深夜の海沿いの国道の…

歩道を歩いていると、次々に車が寄せてきては止まった。

「お嬢ちゃん、ひとり～？」

「乗ってかな~い？」

「イイコトしようよ~？」

…無視！

下を向いて、カバンを胸にしっかりと抱えて、どんどん歩いていくと、たいがいの車は、

「…チッ！」とか「すかしてんじゃねーよ！」とか「なんだよドブス！」

…とか言い捨てて、走り去って行く。

けれども。

外人が四人乗っている車が、音もなく路肩に寄せてきて、停まった。

ドアを半分開けて、上半身だけ乗り出してきた外人男が、腕時計と地図を振り回して、カタコトの日本語で「スミマセ~ン、チョト、オシエテ~！」と、困っているような様子で、叫ぶ。

…迷子なのだろうかと、一瞬、油断した隙に。

がつっと！ 腕を掴まれて。車に！

…連れ込まれそうになった…！

必死で。暴れた。

「…何をしてんだッ！」

通りすがった自転車の高校生が、怒鳴りつけてくれた。

暴れている章子を道路に突き飛ばして落として、車は、乱暴に走り去った…。

「怪我した？」

「いえ…」

ぶつけたりすりむいたりはしていたけれども、章子は震えながら立ち上がった。

さっき海岸で絡んできた男の子たちと、同じ制服だ。…怖いッ！

…逃げなければ…！

自分のことまで警戒しているらしい章子の様子に気づいて苦笑して、

「…気を付けろや。このへん夜中は危ないから」

男の子。なのに…

章子を心配する声だけ残して、自転車は何も悪いことをせずに、走り去って行った…

章子は、拍子抜けした。

でもそこへ、今度は、聴き間違えようのない暴走族の暴れる騒音と…

「そこのバイク、停まりなさ~いッ！」

叫ぶパトカーらしいマイクの音が、遠くからこちらへ向けて、真っ直ぐにやって来る…

(…この道は、危ない！)

章子は、次の信号まで走って、急いで渡って、脇道の小さな商店街の方向へと、逃げた。

*

海岸の国道から直角に曲がる形で続いている商店街をしばらく北上していくと、駅前の繁華街に着いた。そこでほんのちょっとだけ休憩して百円のハンバーガーだけ食べると、章子はまた、線路沿いの細いけど街灯がちゃんと点いてる明るい道を、西に向けて歩き

始めた。

歩いて歩いて歩いて行くと、帰宅中の同じ方向の人の姿が途絶えて、今度は向こうから歩いて来る人の数が増えて来て、しばらくまた歩いて行くと、次の駅に近いほうの商店街の外れの明るい場所に着く。

そんなことで何駅分かをしばらく歩いて行くと、本当の深夜になってしまって、開いている店はコンビニと女の人のいる呑み屋さんだけ。という時間帯になった。

章子は疲れてきた。

でもお金はないし、大きなお風呂やさんもないし、どこにも行くアテがない。

小さな公園が目についた。そっと入ってみた。

周りの民家はもうみんな寝付いている風で、用心深くあたりを見回してみたけれども、だれも章子を見ている人はいない。

そーっと。

公園のすみのタコ型の遊具のなかのトンネルをのぞいた。

ずっと前に章子の家の近くのこういう場所でホームレスの人が何日か寝泊まりしているところを見つかって、近所中のオバサン達が大騒ぎをして警察を呼んだことがあった。

「あ～あ。寝心地が良かったのに…」

なんでもないことのように小汚いオジサンは呟いて、荷物をさっさとまとめると、おとなしく追い払われて去った。

あんなふうに…

潜りこんでみた。

案外、居心地が、良かった。

ジャージの入っている袋を枕にして、章子は、眠りについた…。

あまり寒いとは思わなかったけど、けっこう蚊に喰われた。

夕方に海岸沿いでせっかく気持ちよく目が覚めたのに…

その後何度も怖い眼に遭ったせいで、あんまり眠れなかった。

明け方に、すぐ枕元を走りぬけて行く新聞配達のバイクの音でびくっとなって飛び起き、頭をトンネルの天井にぶつけて「眼から火花が出る」という痛さを実体験した。

すぐに牛乳配達のトラックのかちゃかちゃ言う音が通り過ぎて、章子は自分のいる場所が裏の家の玄関から丸見えだということに気づいた。

慌てて這い出して、公園の水で顔を洗ってトイレを借りてペットボトルに水を詰めて、歩き始めた。

そんなふうな日々が、始まった。

*

日曜日は一日のんびり西へ西へと歩いて、夕方早目の時刻に、道沿いにまた大きなお風呂屋さんの看板があるのを見つけた。

今度はゆっくりじっくり料金表をよく読んで、「土日は高い」ということと、「夜十一時以降までいると別料金が加算されて値上がり」するけど、「その前に帰るなら昼のあいだ何時間いても同じ料金で割と安い」と知った。

それから入ろうかどうしようかと玄関前でうろうろしているうちに、この先の西へと続く国道沿いにもチェーン店がいくつもあることが判ったので、地図の乗ったチラシだけ握りしめて、ほくほくしながら店には入らずに歩き始めた。

歩きながら、いくつか作戦を考えた。

家出中だと、ばれたらまずい。

お金はなるべく節約しないと沖縄に着くまで？ 生き延びられない。

でも何日もお風呂に入らなかったら一目でホームレスと判るくらい汚れてしまう。

だけどコインランドリーはお風呂の中のやつより、商店街の外れのお店のほうが安かった…。

道沿いの百円ショップで小さな目覚まし時計と大学ノートとシャーペンと、古本屋の格安コーナーで大学受験の参考書と、東海道『銭湯・スーパー銭湯・日帰り温泉』というガイドマップを買った。

それから「いかにも地元の人」に見えるように、安っぽいペラペラの寝間着ジャージとTシャツを買った。

これだけで一日の予算「千円」を使い切ってしまったけれども、御夕飯は閉店間際のスーパーで半額シールの貼ってあるうちで一番大きなお弁当をひとつ買った。二百円で満腹サイズだ。

駅の待合室で塾帰りの子どもが遅い電車を待ってるような顔をしながら、がつがつ食べた。

トイレを借りて、歯も磨いちゃって…、

また、歩き始めた。

夜更け…

手頃な公園の、小さなベンチの影の、植え込みの下で寝た。

明日は、蚊よけスプレーも買ってこよう。

と、固く決意はしたけれども、昨夜よりは安眠できた。

*

夜明け。

新聞配達のバイクの音を目覚まし代わりに、ジャージの中学生の朝ジョギングです！

というふりをして…

西へと、走り始めた。

走ったり歩いたりして、平日月曜日に中学生が街をふらふらしているわけにはいかない時間が近づいてくる前に、どこかの駅前のファーストフードの店の禁煙席の一番外れにそっと座った。

百円バーガーひとつと百円コーヒー一杯で、何時間、粘れるかな…？

店内だけど、深くフードをかぶって、中学生の顔を隠して。

昨日買った大学受験の参考書とノートを開いて、「十八歳の浪人生が受験勉強してます！」という偽装をして。

「うっかり寝込んだ」ふりで… テーブルにつっぷして寝ちゃう。

…けっこう、起こされなかつた…。

午後二時を過ぎたら、もう顔をさらして中学生が町を歩いていても、大丈夫だと思う。

西へ、西へと歩いた。

ガイドマップで目星をつけておいた銭湯に夕方の早目に入った。

さっぱりお風呂に入って、安っぽい「寝間着ジャージ」に着替える。

脱衣場のすみの畳の休憩スペースで、またしばらく、ぐうぐう寝ちゃう。

目覚まし時計で素早く起きて、もういっかい頭を洗って、閉店準備が始まる前に、さっさと店を出て。

閉店間際のスーパーで半額のお弁当を買って、どこか適当なところで食べて。

またしばらく歩くと、深夜の街道沿いに、大き目の無人のコインランドリーがある。

服を洗いながら備えつけの漫画なんか読んで時間を潰して、深夜になったらまた歩き始めて…

手頃な物陰に潜りこんで、眠る。

けっこうスリリングで、緊張するけど解放感もある愉快な日々で。

毎朝無事に？ 目が覚めるたびに、

(ああ… 良かった。今日も、生き延びられた…！)

と、思った。

あの地獄の家に縛られていた何年もの長い半生の間は、一度も感じたことのない歓びだった。

洗濯とお風呂は予算を考えると毎日は無理だったので、二～三日にいっぺんにして節約した。

そんな風にして何日かが過ぎた。

細切れの睡眠で、日付の感覚はなくなってしまった。

今が何日かも分からなくなつたけど…

家を出たあの日から一万円札が合計三枚、無くなつていた…

6. 海辺の街 (一日目)。

6. 海辺の街 (一日目)。

例によって百円のシェイクと百円のハンバーガーだけで午後の出歩ける時間になるまで粘るつもりで入った、名前も知らない小さな駅の名前も知らない小さな商店街の全国同じような造りのファーストフード店の二階の禁煙席の片隅で、手元に残った三枚の一万円札と千円札と小銭の数を全部もういちど数え直して、章子はため息をついた。

一万円札が四枚なくなるまでに、約一ヶ月かかった。

残りの三万円ちょっとで同じように歩き続けるとしたら、あと一ヶ月も、もたない計算になる。

おこづかい帳を付けておくべきだったか？ と、ちらっと思ったが、いつだって、本当に必要だと思ったことにしか殆ど使わなかった。

(たまに、どうしても梅雨時の深夜に歩くのは嫌で一晩スーパー銭湯に泊まってしまったり…を、無駄使いと考えるかどうかは、今さら悩んでも意味がなかった。)

そして歩けた距離ときたら…

とてもではないが、あと一ヶ月しないうちに沖縄とか、せめて九州の途中までとか…

絶対に、無理。(笑)

東海道五十三次と言うからには東京から大阪までは中学生の脚でも二ヶ月も歩けば着くはずだと考えていたが。

昔の大人の男の人はきっと今の章子の倍くらいの速さですたすた歩けたんじゃないかと思うし、おそらく朝は日の出の前に起き出して、日暮れまで一日ずっと、黙々と歩き続けていたんじゃなかろうか。

そして夜はちゃんと宿に泊まって、ひと風呂浴びて美味しいご飯をたらふく食べたら、何の心配もせずに屋根の下で朝まで熟睡して、鶴の鳴き声なんかで夜明け前に起こされるのだ。

対するに章子ときたら家出してきた中学生だとばれないように、そして男の人から乱暴されるハメに陥らないように、人目を避けて、時間を限って、早朝と夕方と夜は早めの時間帯だけで細切れに、しかも連日の野宿でびくびくして眠るせいで疲れが溜まりきっていて、背中を丸めて小股でのそのそ歩くから、きっと昔の男の人たちの半分か、それ以下くらいの、のろのろペースではなかろうか。

それとも『東海道』って東京から大阪までじゃなくて、東京から名古屋までとかのことだったんだろうかと、次に図書館を見つけたら立ち寄って調べてみよう…と思いながら、記憶にある限りで出来るだけ正確に、受験生のフリ用に買ったはずが日記帳か雑記帳のようになっている大学ノートに、日本列島の白地図の形を書きこんでみていた。

そもそも現在地がどこなのかも正確には把握していなかったが、関東と名古屋のあいだのどこか、(それでも一応かなり西のほう?)…だ。

歩けただろう距離と、だいたいの日数と、使った金額を、割ったり掛けたりしてみる。

…無理。(苦笑+溜息)。

(…どうしよう…)

…どうやって、生きていったらしいの…??

まとまらない考えと不安と、大人に見つかって捕まつたら、地獄に連れ戻される!…という恐怖のせいで、ハンバーガーひとつでは全然足りない! とさっきから訴えている空っぽ同然の胃袋が… きゅっ!…と、締め付けられて、痛くなった…

(よそう。)

お金は、使うだけなら、なくなる一方だし。

どうがんばって歩いても、これ以上は… 速くはならない。

まともに一晩とか、まとめて眠る機会がほとんどないので、章子はとことん疲れきっていた。

(どこかで、住み込みで、働かせて、ほしい…!)

とにかく、ちょっとでも、仮眠してから考えよう… と。

店のテーブルに突っ伏して寝入る体勢を整えようとしていたら…

眼下の駅前ロータリーに。

ちょうど到着した、何かの臨時特急のような、この辺では滅多に停まらない「長い」列車から。

わらわらと、駆けだしてくる…

小学生!

中学生!

幼稚園生とかを抱えたりベビーカーを押したりしている…

大量の、…家族連れ!…???

(…あっ!)

…と、章子は驚いた。

カレンダーは買ってなかったので、日付が判らなくなっていた。

今日から、夏休み!

だった…。

*

それでもせっかくだから、と、お店の片隅で数時間くらい、突っ伏して眠った。

うとうとしながら片耳で駅のホームから響いて来るアナウンスを拾っていると、特急の臨時停車とか臨時増発の快速電車とか…が、二時間に一本くらいかもっと、頻繁に停まっているらしい。

駅前にあふれだしてくる人の波の服装とか荷物を見ていると… すぐ近くにかなり大きな、海水浴場が、…ある、らしい…?

うずうずしてきて、章子は予定よりはかなり早い時間帯に、店を出た。

人波に紛れて、みんなが目指す方向に…

あるいた。

わくわくしてきた。

からりと乾いた陽射し。遠くから漂ってくる、はっきりした磯の香り。

駅前からまっすぐ続く道は両脇の歩道の幅がやけに広くて、それでも狭い！ という勢いで、いっぱいに溢れる、人波が…

途中の喫茶店や海鮮料理屋さんや、威勢よく立ち並んだ焼きそばやカキ氷の屋台で早々に一服している人たちも含めて… 笑顔と歓声で、満ち溢れている。

(うわ… また、天国に近くなつたあ…！！)

東海道中とはいえ海に山が迫る地形だった片田舎のあたりでは、かなり地獄に近づいたと思った苦労の後だったので、章子は嬉しくなった。

道中のお店で、えい！ という勢いで、一番安くて色気はまるでない、オバサンみたいなずんどうの水着を買った。

海に着いた！

いっぱいに… 人！ 人！ 人！

…子ども！

値段の高い『海の家』の群れの前を延々と、きょろきょろしながら歩いた挙句に、無料休憩所、という隅っここの公立施設をようやく見つけて、混雑している片隅でいそいそと着替えて…

海！

いやいや、ちょっと待って…！ と、自分に声をかけて、ちゃんと？ 準備体操をして… いそいそと、波に分けいった。

海！

…で、泳ぐ。のは、本当に。

何も、まだ知らなかった、小さかった子どもの頃… 以来？

海！

波！

(……おばあちゃ～ん……！！)

あれは… 北関東の… それとも南東北の… 東向きの、海だった…

章子は、ようやく、なぜ自分が、

「死ぬなら、海を観てから」と思ったのかを、思い出した。

あれが最後の夏だった。家族が、地獄になる、前の…

あのお葬式の、前の。

*

ぼんやりしながら、何も考えずに、ただひたすら、波をかきわけたり、泳いだり、浮かんだり、砂浜に寝転んで昼寝したり…

していた。

午後も遅くなり始めると、小さい子どもを連れた家族は、早々に帰り仕度を始めた。

その一方で、またどんどんと、砂浜につめかけてくる、やや年代の高めの子どもを連れた人たちや、地元民らしい中高生や、帰省中か旅行中の？ 大学生らしい集団や…

(…女子ひとり…で、遅くまで砂浜にいたら、また、危ない…！)

章子は気がついて、あきらめて順番に並んで三分間無料の公設のシャワーを慌ただしく浴びて、着替えた。

ゆっくりと引き潮のよう駅や街へ向かって歩いていく人の波にまぎれた。

道中、脇道にそれで行く人たちは…

あちこちの、「民宿」とか「ホテル」とか「旅館」とかとか…の看板に、
「ただいま～！」と声をかけては、広い玄関に入って消える。

(いいなあ…)

章子は思った。

どこかに、今晚、潜りこんで眠れる場所を…

見つけなければ、ならなかった…

が。

海側はこの時季ずっと夜遅くまで人出で賑わっているようだった。

何かと思ったら背後で、すばばばば～ん！ と物凄い音がして…

花火大会まで始まった。

もちろん、歓んで最後まで観てから、また歩き始めた。

焼きそば屋は高い。お好み焼き屋も…高い。

地元民御用達のスーパーは…花火大会用の高いものばかりになっていた。

(…おなかが減った…)

章子は、歩いた。

みじめな気分に、なってきた…

歩いた、歩いた…

一時間か、もうちょっと…

隣の駅に、たどり着いていた。

*

かなり大きな、街だった…！

各駅停車の列車が着くたびに、隣町の花火大会から戻ってきたらしい人波がどっと溢れだしてきては、各方面にわさわさと、賑わいながら消えていく。

海からの臨時バスも次々到着して、吐き出された人たちは、また次々と、家路へと続くバスに乗り換えては去って行った。

これだけ大きな街なら、どこかに潜りこんで、しばらく休めそうだ…？

章子は期待したが、しかし困ったことに、これはと思う公園とかの物陰には、花火大会帰りの友達グループとか恋人同士とかに… 占領されていた。

章子は眠る場所もなく、食べるものもなかった。

みじめになった。

…と。

駅前の繁華街からはかなり歩いた、住宅街のふちに。

閉店間際の大きなスーパーがあった！

ふらふらと入ると…『半額』！と大きなシールの貼られた大きな『花火弁当』とやらが…！

まだ、いくつか残っていた。

残業帰りらしい会社員や兼業主婦の人たちと争うようにして一つ確保して、いそいそとレジに向かった。

(どこか、座って食べられる場所を…！)

と、思ったら、スーパーの後ろがかなり大きな『市民公園』になっていた。

花火帰りの子どもたちがまだあちこちに居る。

(これなら！)

章子は悦んで、隅っこベンチに座ってお弁当をがつがつ食べた。

満腹できたら、かなり気分も大きくなってきた…。

(どこか隅っこで、こっそり眠れそうよね…？)

どうせ沖縄までは、いくら歩いてみたって、着けやしないんだし…。

明日もう一度、海まで歩いて、ひと泳ぎしてこよう…！

何日か、ここでゆっくりしてみるのも、良さそうだった…。

ちょうどいい物陰だったので、誰にも見られていないことをよく確認した上で、こっそりと潜りこんだ。

虫よけスプレーを節約しながら使って、ぼろぼろになってきたリュックを枕にして、ゆっくり、眠った。

7 海辺の街。(二日目) ... 焼きそばと図書館...。

7 海辺の街。(二日目) ... 焼きそばと図書館...。

いつものように、新聞配達のバイクが走りぬけて行く音で、びくっと目が覚めた。

もちろん夜明け前だが、東の空はもう明るい。

いつものように、すっかり慣れっこになった公園のトイレを借りての洗顔と歯磨きを手早く済ませると、部活の朝練前の自主トレ早朝ジョギング学生のフリを装って、章子は、たったかとたったかと、今日だけは今までと違って、昨日きた道の方向をめがけて、逆戻りで走り始めた。

海へと走る道沿いの、空はどんどんと耀くなつていって…

みごとな朝焼けの、東の水平線の金と朱色のグラデーションの帯から、西の濃紺の空にゆっくりと、白い月が傾いていくところまで…を、一望に見渡せる川沿いを走って。

まだまだ人けの少ない超・早朝の海岸べりに小一時間ほどでらくらくと走り着いた。

こんなに自分が走れるなんて！ と、章子は自分で驚いた。

一ヶ月、歩き続けたおかげで、ひよわで運痴な自分でも、ずいぶん、筋肉が鍛えられたらしい…。

Tシャツと短パンはさっさと脱いで、ちゃっかり下に着こんでいた水着一枚で、ひやっほう！ と、まだほとんど貸し切りに近い海水浴場に一番のり！…という勢いで飛び込む。

見渡すと、海岸沿いのあちこちで、「このへん一番乗り！」と駆けこむ子どもや学生や…が、結構たくさん居て、さらには沖合には、すでにウィンドサーフィンの帆がかなり、立ち並んで行ったり来たりしている。

天気は快晴で、海風は穏やかだった。

章子は心ゆくまで、「ほぼ貸し切り」の朝の海を、泳いだり浮かんだり、砂浜で遊んだり、貝を突ついたり魚を眺めたり…して、の～んびり！ と、…「夏休み」を楽しんだ…生きてて良かった！

…と、しみじみ思った。

こんなに、世界が、広くて、

美しいなら…

…野宿しても、

…お腹がすいても！

がんばって、生き延びてみる、

価値はある。

.....よね.....?

七時を過ぎると、大人に連れられた小さい子どもたちも次々と海岸にやって来て、気の早い海の家も営業を始めて、トウモロコシを茹でる匂いや、たこ焼きやイカの焼ける匂いが、あちこちから漂い始めた。

章子の胃袋が、健全にぐーーーーーっ！と鳴った。

海べりの砂浜の場所は子どもたちに明け渡して、道路との境目の石段にバスタオルを敷くと、昨夜のスーパーで弁当と一緒に買いこんでおいた半額のパンを、公園の水道からペットボトルに汲んで持ってきたぬるい水で口を湿らせながら、一度に三つも食べた。

久しぶりの、贅沢？ だった。

日焼けし過ぎないように、もうかなりぼろぼろになってきたパーカーのフードと、その辺で拾ったビニールシートで陽射しを防御して、そのまま海岸線で、しばらく眠った。

午前十時を過ぎると、もう車のクラクションやら場所取りの口論やら子どもたちの喧嘩やら泣き声やらで、眠るどころではなくなった。

章子は苦笑して、小さいリュックに全てを詰め込み直して、また、歩き始めた。

(...さて。どうしようか...?)

もうそんなに頑張って沖縄まで歩かなくても、夏のあいだ、ここの街でなんとか居場所を見つけて、しばらくのんびりできないだろうかと、思った。

旅館やホテルが沢山ある。

歳を誤魔化して高校生ってことにして。

なんとか、住み込みで、働かせて、もらえないだろうか...??

*

ほんやりと、何も考えずに昨日の、海に一番近いほうの駅の方向へと、海沿いの混雑した国道よりは何本か陸地よりに入った裏通りを、とことこと歩いて行った。

この辺りにもあちこちに屋台やら駄菓子屋さんやら、サーフショップやらが、けっこう点在している。

お昼の、午後0時の時報らしいサイレンが、長々と... のどかに鳴った。

じゅうじゅうと焼きそばの焼ける、ソースのいい香りが漂ってきていた。

『バイト！ 大・大・大・大至急～募！

午前十一時～午後三時、休み：火曜日

... 今日だけ！... でも可！』

と、でっかーく、...おそらくカレンダーの裏紙かなにかを使って...

手書きでざくざくっと描いて、大急ぎで貼ったらしくて、なんだか傾いている...

ポスターが、目に飛び込んだ。

「おばちゃん、焼きそば五つ～！」

「はーい！」

「おばちゃん、お水もう無いよ～！」

「ごめん！…自分でやってくれるッ？」

「すいませーん、カキ氷ください！」

「はいはいはーい！ ちょっと待ってね～ッ！」

元気に叫びながら、必死の勢いで飛び回っている小母さんが、そのポスターのお店の中に居た。

四人掛けのテーブルが五つか六つくらいと、カウンター席と、店の前の大きなカキ氷器と、生ビールのぶしゅーっとやる機械が、今どきまだ現役で有ったか～！ と章子などは思うくらい、古い古い木造の小さな平屋のお店のなかに、ぴかぴかとひしめいている。

品書きは、焼きそばとカキ氷とソフトクリームの他は、ジュースとかコーラとかと、カレーライスとオムライスとオムソバと、あと簡単そうな定食が何種類か。…だけだ。

「おばちゃん、まだ～？」

「はいはーい！ 今すぐ！」

「さっきから待ってんだけど～！」

「今ね！ 今ね！ すぐねっ？」

「は～や～く～っ！！！」

バイトがどうこう、というよりも、とにかくその小母ちゃんが…

大変そうだった。

章子は、自然に動いていた。

「…あのっ！」

「はいはーい」

「おもてのポスター！ …あたし、手伝いますっ！」

「…あらっ？」

小母ちゃんは一瞬だけ、手を止めて章子を上から下まで、眺めた。

「…中学生…？」

「高校生ですッ！ …一年ッ！」

章子は強気で言い切った。

この一ヶ月の放浪生活で、嘘は堂々とついたほうがバレにくい。と、しっかり学習していた。

「十五歳は過ぎてますッ！」

「…………あら～！ 助かるわ～っ！

…そこのお皿！ とにかく洗ってくれる～ッ？」

そう言いながら焼きそばを持って小走りに調理場から出て来る小母さんに、

「ちょっとこのお皿！ 濡れてるじゃないのッ」

と、お客様から小言が跳んだ。

「すいませんね～、さっきまで団体さんが来てたもんで、お皿洗いが間に合ってなくって～…っ」

「…やりますっ」

章子はすぐに手を洗い、スポンジに洗剤をたっぷりふりかけた。

…人生、何が幸いするか、解らない…

と、思った。

ずっと学校でイジメラレていたから。

林間学校や調理実習やで、いつも皿洗いや掃除なんかは、一人でやらされてきた。

二グループ十二人で手分けして分担するはずの、一学年分百人以上の喰い散らかしの食器類をたった一人で下げる洗って、拭いてしまって…を、全部押しつけられた時には、さすがに哭きそうになったけれども。

おかげで、お皿を早く精確に洗って片づけるのは…得意？だ…！

山盛りのお皿を、どんどん洗って、片端から手順良く拭いて、どんどん棚の上に戻していくと、小母さんは調理と配膳に専念できて、ずいぶんラクになってきたようだった。

お皿がひと段落すると、「これあっちのテーブルに！」とか、「この氷三つに苺シロップかけて～！」とか、他の仕事も頼まれた。

章子にも、できる作業だった。

歓んで、飛び回った。

*

「…………あ～！ 今日はありがと！ ほんとに助かったわ～っ！」

小母さんは滴る汗をぬぐいながら、本当に嬉しそうに、レジに溜まっていた大量のお金を計算して黒い小さなカバンに詰め込みながら、言った。

お店はあともう閉める準備だけになってきていて、人の流れは海岸から駅に向かって、たらたらと歩く疲れた顔の家族連れが中心になってきていて、たまにソフトクリームの注文が入るくらいで、中に座って何か食べて行こう…というお客様は、めっきり減ってきていた。

「ほら！ 急がないと電車に遅れるわよ！」

残り少なくなったアイスクリームの入っている平たい冷蔵庫を残念そうに覗き込んでいた小さい子どもがお母さんに引き立てられていく。

「すいませ～ん、焼きそば～！」

「あっごめ～ん！ 今日もう売り切れ！ なんですよ～っ」

「あらら残念… ここもかよ…？」

「ごめんねえ～っ」

小母さんはほくほくした顔で、ちっともごめんとは思っていない声で、ちゃらっと断っていた。

「…少ないけど、今日の分、これでいいかな…？」

章子は驚いた。

千円札が…！ 三枚も…ッ！

「…足りない…？」

「いえっ！ 多いんでびっくりしましたッ！」

「あらそう？」

小母さんはにこにことした。

「…それで～、もし良かったら～、あした、とか。も～。…？」

「…来ます！ はいッ！」

「わあほんと？ 嬉しい。頼んでた人が、急にダメになっちゃってね～、困ってたのよ～！」

そう言いながら、小母さんは「はい、まかない♪」と言って、最後の残りの焼きそばの、ちょっと冷めかけてるけど十分美味しそうな大盛のお皿を、章子の前にトンと置いた。

「…これ、食べていいんですか…ッ？」

章子のおなかが、再び、ぐ～るぐ～る！…と、派手な音を立てた。

小母さんは笑いながら、お店の片づけに戻った。

章子はがつがつ食べて、残りの冷たいお水ももらってがぶがぶ飲んだ。

「ごちそうさまでした！」

お皿も自分で洗って、ついでにシンクも拭いた。

「あら～、ありがと～っ」

「じゃ！…明日、十一時にまた来ますっ」

ぺこりとお辞儀をして、章子はいそいそ…

店を出た。

*

(………凄い！)

それは章子が生まれて初めて、自分で働いて、稼いだ金だった。

『…誰が養ってやってると思ってるんだ…ッ』

鬼父が鬼母を殴る時の定番の罵声が、遠く耳の中で、響いた。

『ありがとね～！ ほんっと助かったわ～ッ！』

小母さんの嬉しそうな明るい声がかぶさって、打ち消した。

(…明日も！)

働くなら…

お金が…

貯められる…！？？

(沖縄に…！ 往けるだけの、電車代と船賃が、この町で、稼げるかしら…ッ？？)

章子は嬉しい勢いで、もう一度、人けが少なくなってきた海岸に戻って、海に飛び込んだ。

ばしゃばしゃと泳いでいたら、海岸警備の人に、

「もう遊泳時間は終りでーす！」と、叱られた。

夕陽を見ながら、また慌てて無料の水シャワーを浴びて着替えて、隣駅の大きな繁華街へと続く川沿いの道を、片道一時間ちょっとをかけて、…のろのろ、歩いた。

へとへとだった。

今夜は、道沿いの大きなスーパー銭湯に、泊まった…。

8. 続・海辺の街。(夏休み！ そして…)

8. 続・海辺の街。(夏休み！ そして…)

章子にとって生まれて初めての「夏休み！」が、始まった…。

朝は新聞配達の音を目覚まし代わりに起きて、海辺まで軽くジョギングして、軽く泳いで、買っておいた半額パンで朝食にして、軽く仮眠をとて、午前十一時の少し前に、小母さんの店に出勤。

日中は、とにかく忙しい。

テーブルを拭いて床を掃除してお店を開けて、ソフトクリームを作って売ってカキ氷を作って売って、小銭を数えてお札を両替して、注文をとて伝票を書いて小母さんに伝えて、ビールを注いで出して料理を運んで出して、空いてるお皿があれば素早く下げて、お会計してテーブルを拭いて、お皿を下げて洗って拭いてしまって、時々は近所のスーパーまで七味だの青のりだのマヨネーズだのキャベツだの長ネギだの、どうしても足りなくなった物のリストと小銭入れを握って、ダッシュで買い物に行く。

小母さんのお店は夏休み以外は普通の定食屋さんで、主なお客さんは近所の工場や中小企業の人たち。だから普段から平日の十二時過ぎから一時ちょっと前まではランチタイムのお客さんが詰めかけてなかなかの忙しさ。

そこへもってきて夏休みには有名海水浴場のはずれの穴場に続く抜け道を知ってて往来していく半地元民の通りすがり客がどんどんひっきりなしに入って来ては焼きそば大盛とか海鮮定食ワサビ抜き！ とか、どんどん遠慮なく頼んでくるので、もう本当に目が回る。

それでも途中で必ず十分くらい、ちょっと空いたすきを見計らって小母さんはトイレ休憩を章子にとらせててくれて（自分も何かの隙を見つけては章子に店番を任せられると喜んで、素早く一服して来て）、そんな時には「素早く食べちゃいなさい！」と、ソフトクリームを一つ持たせて、店の裏の椅子に座らせてくれるのだった。

結局毎日午後四時過ぎまで働いて、小母さんは五時間分だと言って四千円も払ってくれる。そしてその日の残りもので美味しい「まかない」を作って食べさせてくれる。

章子はがつがつ食べて素早くお皿を洗って、閉店準備を始めた小母さんにきちんと挨拶してから海岸まで歩いて、怒られないように六時ちょっと前までだけちゃちゃっとひと泳ぎして急いで水シャワーを浴びて。

それから、また、隣の駅前まで歩く。

夕焼けが、とても美しい。

よく晴れた日の続く、乾いて熱い、夏らしい、夏だった。

*

隣町に着くころには、もう暑くて暑くて、汗だくになっている。

クーラーを求めて、駅ビルあたりを徘徊しているうちに、隣接した地域の市役所内に駅前中央図書館。という看板があるのを見つけた。

夏休み期間中はお盆休みを除いて、毎晩九時まで特別開館！ とか…

素敵♪

章子はいそいそと入り込んで、座った。

家出娘の身では、貸出カードが作れないのが、残念だったけれども…

閉館ぎりぎりまで面白い本を探して次々に読んで、帰る人たちに紛れて夜の街に踏み出こと、夏休みを満喫している地元の子どもたちがあっちにもこっちにもたむろしていて、章子が小母さんに言い訳に使ったように「夏休みだけ、こっちの親戚の家に来ている。」らしい子どもたちもみんな、一人でぼつんと立ち読みしてたり、音楽聴いていたりする。うろうろしているうちにスーパーの閉店時間が近づくと、めぼしいお店を何軒かまわって、一番お得なサイズの半額弁当と、明日の朝の分の半額パンを、しっかり買い込む。駅前広場のすみのベンチでゆっくりもそもそと遅い夕飯を食べて、ほどよく人通りが絶えてきて、でもまだ子どもが一人で歩いていても不審がられないくらいの遅さの時刻に、そーっと…

明るいうちに目星をつけておいたいくつかの公園の目立たない物陰を毎晩あちこち渡り歩いて、人目を避けてそーっともぐりこんで、バイト料で買い替えたばかりの、安いけど新品のお気に入りのリュックを枕に、虫よけスプレーをしゅーっと気前よく使って、また朝まで眠る。

*

毎週水曜日と、朝から雨が降ってた日には、バイトは自動的に休みで。

章子は図書館に終日こもって、わくわくと本を読んで過ごした。

そのままいつのまにか眠ってしまっていても、誰にも怒られなかった。

面白い本を読み漁るかたわらで、合間の時間を使って、章子は調べものもした。

沖縄までの、列車と船の乗り換え経路と、所要時間と、必要な切符代。

これは、時刻表、というものを始めて読んでみて、もっと早くに調べれば良かった！ と思った。

夏休み（と冬休みと春休み）の間だけ使える、特別な格安切符というのが、ある。

各駅停車のJRにしか乗れないけど、とにかく一日二十四時間かける五日間、乗りっぱなしで、乗れる。

これ一冊買ったら、乗り継いで、乗り継いで…

余裕で、九州の南端まで行ける。

そこから船に乗り換えて…

行けば… 沖縄には…

島が、沢山、ある…。

このどこかで、仕事を。

今度は、できれば、住み込みで… 働ける、場所を。

…探すのに、いま小母さんの店でバイトしているのはきっと役に立つだろうと思った。

せっかくだから、夏休みの最終日が近くなるまで、小母さんの店で働かせてもらおう。

(毎年、子どもたちが「宿題が…終わってないっ」と叫びだす頃になると店は暇になり、バイトも要らなくなるという話だった。)

その最後の日の夜に切符を買えばまだ間に合うから、夜明けを待って、始発に乗って、乗り継いで、乗り継いで…

もし途中で大人に見咎められたら、「私立の高校なんで九月半ばまで夏休みなんです～これから家に帰るところです～！」と。

嘘をついて、切り抜けよう。

同じ嘘で、

…沖縄行きの、フェリーに乗って…

あとのことは、向こうに着いてから、考えよう。

(…小母さんに貰ったバイト代がた～くさん！ あるから、仕事が見つかるまで、しばらくは、沖縄のキャンプ場で一日五百円とか払って泊まって、なんなら海に潜って魚を捕って、たき火で焼いて食べるとかで、一冬くらい暮らしても…

大丈夫！)

章子はそんなふうに考えて、にまにましながら… 眠った。

*

しかし、ある日。

いつもどおり、時間よりちょっと早めにお店の前まで行くと、開店準備中のはずの小母さんが手を止めて、誰かに言い訳？ をしていた。

「…ええと、だって、…本人が十五歳は過ぎてる。って、言ってたもんで…」

「いえ、聞いてません。忙しくて… よく働いてくれてたし！」

(…もしかして、あたしのこと…?)

ぎくっとして、章子は立ち止った。

「しかしですね…」

小母さんの向うに居た人が喋りだすのが、見えた。

制服を着た…ごつい… お巡りさんだ…ッ！

「…おっ」

その制服警官が、立ちすくんでいる章子に気づいた。

小母さんが、気配で振り返った。

「…あっちゃん！」

小母さんが、呼んだ。

「この人が、あっちゃんのこと、探してるって…！」

「…家出人の首藤章子（すどう・あきこ）だな？ 捜索願いが出ている！」

…ひっ！…と、声も出せずに、叫んで。

章子は逃げ出した。

逃げ出そうと…

した。

脚が、もつれて…

警官が、どどっという勢いで奔って追いかけてきて…

「こいつ！ 逃げるかあ…ッ！」

章子の腕を、がしっと掴んだ。

「…痛…ッ」

苦痛と罵声が、章子をどん底に突き落とした。

眼の前が、真っ暗になった。

呼吸が、できなくなった…。

（ああ、…やっぱり死ぬんだ、あたし…）

章子は、もがき苦しんで…

倒れた。

*

目が覚めると、そこは、白い布に覆われた…

病院？ のベッドの上だった。

「あ、気がついた？ 良かったわ…！」

誰かが、小さく叫んだ。

あつと思った。

制服の…

婦人警官？ だった…

章子は絶望した。

（…やっぱり、連れ戻されるんだ。あたし…！）

涙でなにも見えなくなった。

「アキコさん？ 首藤章子さんよね？ あなた過呼吸で倒れたんですって… 判る？

みんな、心配してたんですよ！」

「…帰りません！」

章子は、叫んだ。

叫ぶ声と力があるのが、自分で驚きだった。

「あたし絶対に、帰りません！ …死んでやる！ そのくらいなら、死んでやる…ッ！」

…息が切れた。

それだけで、…まだ横になっているのに、…目が、回った…。

「…安心して。」

誰かもう一人、婦警さんの隣に座っていた、きっと補導員か何か役所の人らしい、黒い地味なスーツの女の人が、穏やかに、言った。

「章子さん、安心していいのよ。あなたはあの家に帰る必要はありません…。」

「あなたが、帰りたくないなら。」

「…………え…………？」

「みんな心配して探していたと言うのは、あなたがもう自殺してしまったんじゃないかと思って。あなたがあの制服やカバンを捨てて行った山の中とかを、警察の人がみんな徹夜で何日も捜索してたんですよ、という意味なのよ。」

「誤解させちゃったみたいで…、ごめんなさいね？」

「…………え…………？」

「あなたがあの日、いなくなった後、病院から警察に通報があって、捜査が入りました。あなたが家族やクラスメイトから毎日どんな目に遭わされていたのか、複数の証言があって、お父様もお母様もクラスの人たちも、みんな取り調べを受けました。」

「お父様は事情聴取中にすごく暴れて、警官と児相の担当者に怪我を負わせたため…」

「現在拘留中で、裁判があるまで、外にも出て来られません。」

「あなたを捕まえに来たりできない状況にありますから、どうか、安心して、私達の話を聞いて？」

「…しばらく、意味が判らなかった。ただ…」

「帰らなくて、いい…？」

「そうよ。安心して！」

「そなん…？？？？」

「私たちは、あなたの味方です！」

全身のちからが抜けた。

がくがくと震えが走った。

章子は、はじめて…

声を出して、泣いた…。

(草稿&没原稿)

(草稿&没原稿)

(草稿&没原稿)

(設定資料)

（設定資料）

（設定資料）

(背景)

場所：地球、日本、関東～東海地方。

時代：20～21世紀のとか。携帯やPCなど時代が特定できそうなものは書かない。

季節：6月（梅雨前？）～夏休み。

(プロット)

(ぶつけプロット) (2019年3月1日)

1. 1日目。(バスターミナル。深夜発)

2. 2日目。(公園。夕刻発)

3. 3日目。(よそハマ。海浜公園)

4. 何日目? (海岸。砂浜)

5. ここはどこだろう? (海岸。岩浜)

6. 夜光虫。(海岸。磯浜)

7. 海辺の町。

8. 夏休みの図書館。

9. 焼きそば屋のアルバイト。

10. 発覚

11. 強制送還

12. 「その話の、続きを。」

(キャラ設定)

(キャラ設定)

(キャラ設定)

(キャラ設定)

(キャラ設定) (2019年3月1日)

・主人公：進道ナツキ

⇒ 首藤章子 (すどう・あきこ)

14歳。中学生。家出少女。

・首藤暉彦 (すどう・てるひこ)

章子の父。役人。(国家公務員)

DV夫。幼稚園の頃から章子を強姦？ (※書かない)。

・首藤昭美 (すどう・あきみ)

章子の母。夫とは婚活で知り合い、「身分違い」と夫の親族からは反対を受けつつ押しかけデキ婚。

立場が弱く、いつもびくびくしている。

(執筆中日誌)

(執筆中日誌)

(執筆中日誌)

(2018年8月12日) 怖いものを見てみる。||||(- - ;)||||

<http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

<http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

2018年8月12日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_1.jpg
http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_2.jpg
http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_3.jpg

...い、いやなことは、1回で済ませるに限る...ッ！！

http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/report/2018/a.html

> 第59回(2018年)講談社児童文学新人賞

> 選考経過・報告

>

> 第二次選考の通過者を発表！ 2018.7.27

>

> 今年で59回を迎えた児童文学新人賞に、530作品のご応募をいただきました。

> バラエティに富んだ、個性あふれる作品の数々をご応募くださったみなさまに、心からお礼申し上げます。

>

> このたび、第二次選考に残った34作品をご報告いたします。どの作品も力作揃いです。

>

> 8月上旬に最終候補作を、8月下旬に受賞作品を、このページで発表いたします。

> 今年度の栄冠はどの作品に輝くのか？ どうぞ、ご期待ください。

>

>

...ちっ！...やっぱり...『落ちた』か、『郵便事故で届かなかった』か、

...どっちか？ だったか...ッ！ (TへT) !...★

(そして...おそらく...「要求されてる方向性と、違った。」らしい...www

↓

http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/report/2018/b.html

> 第 59 回 (2018 年) 講談社児童文学新人賞

>

> 選考経過・報告

>

> 最終選考の通過者を発表！ 2018.8.8

>

> このたび、最終選考に残った 5 作をご報告いたします。

>

> 今年度は、どの作品が栄冠に輝くのか？

> 受賞作品は、8 月下旬に発表いたします。どうぞ、ご期待ください。

>

> ヌック・マッティの銀の夢 釘子乃一

>

> たたきつぶす国語くさかべ かさく

>

> 青の楽園黒木 ぶどう

>

> お絵かき禁止の国 長谷川 まりる

>

> 14歳日和 水野 瑠見

>

> (順不同)

...ふむ...(^ ^ ;) ...

...「この賞」の「受賞傾向」は...「わたし向きじゃナイ」かも...w

... (とりあえず、この項終わり！)

(2018年8月14日) 次回の講談社児童文学新人賞への投稿作のタイトル決まった。

<http://85358.diarynote.jp/201808150547094972/>

<http://85358.diarynote.jp/201808150547094972/>

2018年8月14日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201808150547094972/>

<http://85358.diarynote.jp/201808150547094972/>

次回の講談社児童文学新人賞への投稿作のタイトル決まった。

=====

中2でイントロだけ考えて、どうしても「その続き。」を

想像（創造）することができなかった…

その続き。

今なら、書ける。

コメント

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2018年8月15日5:48

「進道ナツキさんね？ お母さまから検索願いが出てます。」

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2018年8月15日5:49

↑

…って、「欠けてた部分」のビジョンまで唐突に視えたのでw

勝手に主人公の名前まで決まったwwwwwwナツキてwwwwww

(2019年3月1日) 3月は、コレを先にやっつけまーす…！

<https://85358.diarynote.jp/201903011654421199/>

<https://85358.diarynote.jp/201903011654421199/>

2019年3月1日 https://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190301/85358_201903011654421199_1.jpg

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190301/85358_201903011654421199_2.jpg

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190301/85358_201903011654421199_3.jpg

(なんかこれが作業用（いんとろ）BGMにぴったりな感じ…w)

↓

https://www.youtube.com/watch?v=ps0_QRzlp9k

アンインストール【歌詞付】

さて… ひとり脳内「作戦会議」～！…の、結果…★

参照⇒ <https://85358.diarynote.jp/201901011819512100/>

>「投稿用原稿執筆スケジュール」…！

>2019年1月1日リステラス星圏史略（創作）コメント（2）

…現在3月1日。（^ ^ ;）

>1月：『星海女王伝1』（現在執筆中）

>「星海社 Fictions 新人賞」

↑

コレが。「想定外に」手こずってしまっていて、

12～1月の2ヶ月で終わるはずが2月いっぱいまではみだしても終わらず。

（あと20枚くらい加筆？ して「最終推敲」すれば「一応完成」なんだけど…）

んで。 ↓

>※ (4月8日〆切)

... これはもう「一回パス」で、すっ飛ばすしかないとして....。 (- - ;)

↓

> 2月:『はじまりの話』(仮題) (『清峰銳の物語? 1』)

> 「メフィスト賞」

>※ (毎月=随時=〆切)

... 論理的帰結? として、3月は、コレを先にやっつけまーす... !

↓

> 3月:『その話の、続きを。』

> 「児童文学新人賞」

> http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/ \UTF{0023}requirements

> 40字 (E30行のたて書き。10ページ以上、100ページ以下

>※応募受付期間: 2019年2月25日~

> 3月29日 (当日消印有効)

=====

⇒ついで参照。

<https://85358.diarynote.jp/201902221625191909/>

<https://85358.diarynote.jp/201902022103375570/>

... お♪なんか「演歌調」? 笑える? バージョンが... www

↓

<https://www.youtube.com/watch?v=vWrLBsmZN9U>

アンインストール

=====

<https://www.youtube.com/watch?v=XSS2cR2Tvuk>

Wake Me Up - Avicii (violin/cello/bass cover) - Simply Three

(2019年3月1日) ... 作戦たーいむ！... w (^ ^ ;)
w...★

<https://85358.diarynote.jp/201903011654421199/>

<https://85358.diarynote.jp/201903011654421199/>

2019年3月1日 https://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190301/85358_201903011654421199_1.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190301/85358_201903011654421199_2.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190301/85358_201903011654421199_3.jpg

(なんかこれが作業用 (いんとろ) BGMにぴったりな感じ... w)
↓

https://www.youtube.com/watch?v=ps0_QRzlp9k
アンインストール【歌詞付】

さて... ひとり脳内「作戦会議」～！... の、結果...★

参照⇒ <https://85358.diarynote.jp/2019011819512100/>
> 「投稿用原稿執筆スケジュール」... !
> 2019年1月1日 リステラス星圏史略 (創作) コメント (2)

... 現在3月1日。 (^ ^ ;)

> 1月:『星海女王伝1』(現在執筆中)
> 「星海社 Fictions 新人賞」
↑
コレが。「想定外に」手こずってしまっていて、
12～1月の2ヶ月で終わるはずが2月いっぱいまではみだしても終わらず。
(あと20枚くらい加筆? して「最終推敲」すれば「一応完成」なんだけど...)
んで。 ↓

>※ (4月8日〆切)

... これはもう「一回パス」で、すっ飛ばすしかないとして...。(--;)

↓

> 2月:『はじまりの話』(仮題) (『清峰銳の物語? 1』)

>「メフィスト賞」

>※ (毎月=随時=〆切)

...論理的帰結? として、3月は、コレを先にやっつけまーす! !

↓

> 3月:『その話の、続きを。』

>「児童文学新人賞」

> http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/\UTF{0023}requirements

> 40字(=E30行のたて書き。10ページ以上、100ページ以下

>※応募受付期間:2019年2月25日~3月29日(当日消印有効)

=====

⇒ついで参照。

<https://85358.diarynote.jp/201902221625191909/>

<https://85358.diarynote.jp/201902022103375570/>

...お♪ なんか「演歌調」? 笑える? バージョンが...www

↓

<https://www.youtube.com/watch?v=vWrLBsmZN9U>

アンインストール

=====

<https://www.youtube.com/watch?v=XSs2cR2Tvuk>

Wake Me Up - Avicii (violin/cello/bass cover) - Simply Three

(2019年3月8日) つるつるっと調子よく、

<https://85358.diarynote.jp/201903081511543595/>

<https://85358.diarynote.jp/201903081511543595/>

2019年3月8日 https://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <https://85358.diarynote.jp/201903081511543595/>

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190308/85358_201903081511543595_1.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190308/85358_201903081511543595_2.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190308/85358_201903081511543595_3.jpg

…なんか、また「気絶昼寝4時間半」(どうしても起きられない!)の
タイムロスでしたよ…w (- - ;) w…★

原稿、往きまーす！

<https://www.youtube.com/watch?v=-TbTgeVUHKc>

心が落ち着きそうなBGM再

↑

音というより、「画像が」。

「いま書いてるやつにぴったり」…☆ (^ ^ ;) ☆

(14時台) ↑

=====

(15:09) ↓

つるつるっと調子よく、本日予定分が（枚数は見積もりを大幅オーバーして）

（400字詰め換算で）20枚、書けました…♪

（^w^）g

コメント

<https://85358.diarynote.jp/>

<https://85358.diarynote.jp/>

2019年3月14日8:33

cmk2wl @cmk2wl 10時間前

「読者に媚びることは、読者を裏切ることと等しい。」

諫山創

<https://twitter.com/cmk2wl/status/1105819831826186240>

(2019年3月22日) メ切まで、あと一週間になりました！

<https://85358.diarynote.jp/201903221450322595/>

<https://85358.diarynote.jp/201903221450322595/>

2019年3月22日 https://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <https://85358.diarynote.jp/201903221450322595/>

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190322/85358_201903221450322595_1.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190322/85358_201903221450322595_2.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190322/85358_201903221450322595_3.jpg

<https://www.youtube.com/watch?v=-TbTgeVUHKc>
心が落ち着きそうなBGM再

<https://hailstorm.c.yimg.jp/iwiz-weather/lightning/1553232000/1011-0010-101000-201903221420.gif?t=1553232673>
(14:10~14:20)

> 宇宙天気ニュース @swnews 5時間5時間前
>
> \ [記事\] C5.3など小規模フレアの発生が続いています。
> <http://swnews.jp/> # swnews

=====

さて、と。

昼寝たっぷり3時間ちょいの後、PC再起動かけたら14：14でした。

「いよいよ」…！

〆切まで、あと一週間になりました！

↓

http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/

…今回書いてる話は、暗いしつマンナイし対象年齢も高すぎる？ しで…

「ゼッタイ入選できない」。w (^ ^ ;) w

のは、解っているんで、いまいちモチベが低いんですが…。

中学生の頃、本気で自分が家出することを考えていた…

「どうやったら、家出した後、ハッピーエンドになれるのか？」

…の展開が、どうしても思い浮かばなくて…

(それこそ、異世界（異界・冥界？）とかにでも…行かない限り！）

書きだしあぐねたままお蔵入りしていた導入部の…『その話の、続きを。』

なので…(- - ;)。

「書き終えることに意義がある！」はずなので…

がんばりまーす！…(? ?)。

https://www.youtube.com/watch?v=c_IPaa9bTvI

KOKIA - moment (Full Album & bonus tracks)

https://85358.diarynote.jp/home/diary/edit/?time_id=201903221450322595

(関連商品)

コメント

<https://85358.diarynote.jp/>

<https://85358.diarynote.jp/>

2019年3月22日17:12

さっき見たら気温+1°C? まで下がってました…

(今もっと下がったかな…?)

断続的にボタン雪が吹雪いているな…と思っていたら、

今度は、雨嵐? (暴風雨?) の音が…!

(2019年3月24日) 最終章、「書かない。」まま提出しちゃえ！

<https://85358.diarynote.jp/201903241435316769/>

<https://85358.diarynote.jp/201903241435316769/>

2019年3月24日 https://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190324/85358_201903241435316769_1.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190324/85358_201903241435316769_2.jpg
https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190324/85358_201903241435316769_3.jpg

<https://hailstorm.c.yimg.jp/iwiz-weather/lightning/1553403600/1011-0010-101000-201903241400.gif?t=1553404271>
(13:50~14:00)

札幌の外気温は+1°Cまで上りました。

晴れて、道路の雪も解けたな♪…と、思った5分後にはまた吹雪いでいる。
…と、思ったら10分後には、また晴れている。…という不安定なお天気。
(--;)

原稿は…

書きあぐねていた最終章を、「書かない。」まま提出しちゃえ！

…という暴挙な決定を下して、ここにそれを書いている瞬間に、

悠宙舞さん自動推奨で作業用BGMだったコレの画面が…！

↓

<https://www.youtube.com/watch?v=umwcs8CoeAM>

ちょっと切なくて、時々かなしい作業用BGM再

↑

「いま書いてる話にぴったり！」と思っていた、例の…

「夕焼けの海岸線と自販機」画像に…！？（7分頃～）

…てことは、「それでよし！」という神？の御託宣と看做しますよ…？？

（そもそも私が書く話の特徴は、よくもわるくも

「書きこみ過ぎ！」「詰め込み過ぎ！」

「どんだけ設定溜め込んでんの…？！」

…とは、よく言われていたので。（－－；）（同人誌時代）。

今回、気分とノリでだらだらと衝動的に描き進めていたら、結果的に、
脳内にあったエピソード5つ位？かっ飛ばして、さらに終章もボツに。

…（＾＾；）…。

…ものすごく。「説明不足で、エピ不足」だと、思うんですけど…。

まあいいや。どうせ絶対にコレ、入選しないし。w（＾＾；）w

「少女14歳の深刻な虐待家出事件」てのは、そもそもコドモ向けに描けない。
(－－；)

ということが自覚できたので、これはプロトタイプということで…

いずれ大人向けのブンガク作品に仕上げるか、

悪ひらきなおって「どんだけやられる！？不幸少女の被虐体験・えろ仕立て」にしちゃうか…www

（きっと両方描きそう…）

とりあえず。

今回の分は簡単な推敲だけ入れて。

... 今日中に、「一旦終了」にしちゃいます～！

=====

... おお...。ぴったりのCMが...www

↓

<https://ebookjapan.yahoo.co.jp/viewer?sessionid=KB10Bhtbtr5cFs%252BXWA1uNS%252B5pVJ0s1YG&bookid=B00180924881&reflow=false&titleid=473432&type=trial>

毒親サバイバル

↑

(まだ「試し読み」しか読んでないです...w)

(借景資料集)

(借景資料集)

(借景資料集)

奥付

奥付

『逃げなさい！』

(旧題)『その話の、続きを。』

<https://puboo.jp/book/126062>

(着筆：2019年3月1日)

～

著者：霧樹 里守（きりぎ・りす）

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/126062>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

『逃げなさい！』

著 霧樹 里守（きりぎ・りす）

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
